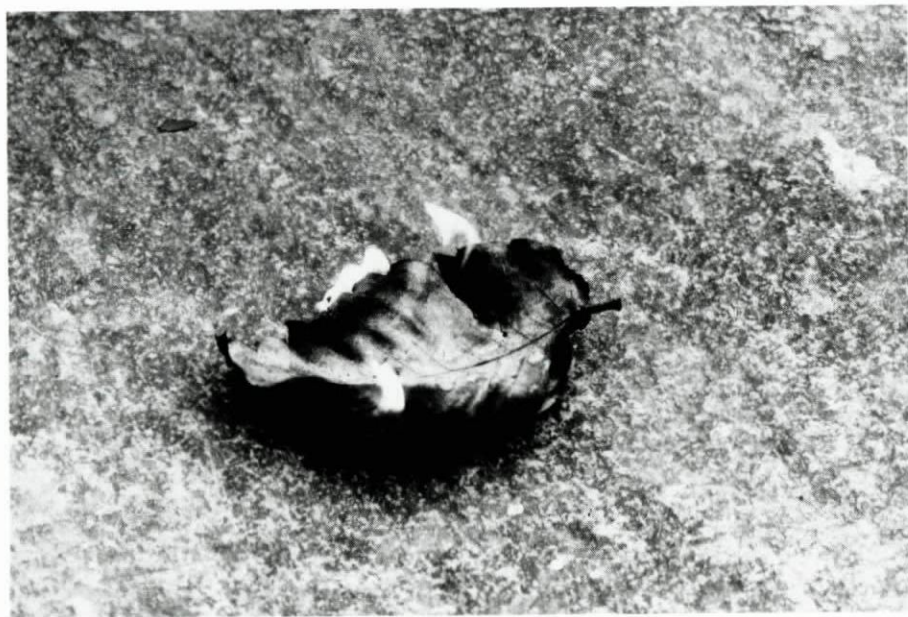


21世紀フォーラム

第15号

特集 たき火





特集／たき火

部会メンバー！ アンケート回答	対談／たき火の美学	たき火	たき火の 思想	たき火	対談／たき火のこころ
45	前田 愛／巖谷國士	木元教子	神島二郎	宮田 登	米山俊直 神崎宣武
	40	39	32	31	26
			夢想在真 に魅惑的 になる時		
			清水邦夫		
			36		

■特別座談会	ハラ七分の思想	伊藤善市 岸田純之助 高原須美子	6
--------	---------	---------------------	---

エネルギー対談	人間社会と第三の火	向坊 隆 五代利矢子	11
	最近の日米間のエネルギー問題	奥山晃希	16
	未利用地の実態と利用方法	政策科学研究所	18
	用語でみるうごき		20

フォーラムズフォーラム

2	アムールランドを見直せ	川喜田二郎	21世紀 フォーラム	五代利矢子	21世紀の落ちこぼれ族	4
3	支配と慣行と規則と	河合秀和		稲葉秀三	21世紀フォーラムについて	5
	インタビュー■おじゃまします			松本重治さん		50
	私の近況	米山俊直		橋口 收 吉川 光		52
	新メンバー紹介			高平哲郎さん		53
49	2001年文庫	君は長島を見たか		部会活動報告		54

アムールランドを見直せ

川喜田二郎

筑波大学教授Ⅱ加藤秀俊部会・松本重治部会

久しぶりで日本研究に立ち戻った。といっても、民族地理学が面白いので、テーマも「日本の生態史的位置づけ」である。まずは永年の空白を埋めるため、むさぼるように教養勉強。幸い巷には良書が氾濫している。

その結果、日本文化の形成に寄与した外からの影響は、中世以前では次の三方向が主だと判断した。(一)アムールランドから主に樺太・北海道経由。(二)西から南海回り西日本へ。(三)朝鮮半島経由、中国文明の影響。ここにアムールランドとは東シベリア・満州・北鮮を中心とする東北アジアのことで、アムール流域を主とする。しかし蝦夷の活躍もその類型の一端と見たい。

ところが驚いたことに、外からの影響という点、朝鮮半島南下の騎馬民族説を除けば、中国文明ばかりを気にするものが圧倒的に多く、他のふたつがあまりにも無視されている(私も騎馬民族説に賛成だが、騎馬民族倭人連合南方渡来説と

いう珍説で、前の三種では(二)に入る)。それでも南からの方角はまだしも幾分論じられているが、アムールランドは完全な無視に近い。こんな不公平があるうか。そこで義を見てせざるは勇なきなり。アムールランドのため、一席弁じたい。

まず旧石器時代以来、日本人の基盤はアムールランドからなのだ。アムールランドは西紀前三千年紀末には新石器文化を、二千年紀中期・末期には青銅器や鉄器の文化をも携り入れ、日本より早く開けた。日本列島では亀ヶ岡式文化に窺うように、縄文文化は北日本中心に栄えている。中国文献を主とする文字記録時代に入ると、肅慎・扶余・靺鞨・挹婁・渤海など、夥しい異名で登場する。しかし時代やリードする部族や国号を異にするに従って、中国人が違う名を宛てたにすぎない。

彼らはいずれも、水田稲作や華北的な熟畑経営の民と異なり、森林地帯を中心に狩猟・漁撈・採集・畑作(時に焼畑)

・牧畜などを複合経営する民である。注目すべきは、彼らに狩猟漁撈民的な機動力・直観洞察力・融通性、そして時に卓抜な組織力が備わっていることである。

スポーツ性があると評してもよい。内陸に住むというイメージに反し、しばしば水軍で敵を脅やかす。恐らくはアムール水系にその伝統があつたのだろう。高句麗もその水軍に悩まされたが、高句麗自身がアムールランド伝統の南下したチャンピオンだろう。十一世紀に日本を襲つた刀伊の賊もアムールランドからである。そこから興つた渤海国と日本とが使節を交換した回数は、遣唐使の倍以上、渤海が契丹に滅ぼされても、再びそれを破つて金が興り、蒙古や中国を圧する。最後には清朝三百年を築き二十世紀に至る。日本はその女真族のリードする中国と闘つたのであり、満州国では女真族の皇帝を推し立てたのだ。

蝦夷は類型上はこのアムールランドの民に似ており、実際に文化の上でも大陸

からの影響をかなり受けたと思う。中尾佐助氏らによれば、日本の作物には北伝のものが幾つかある由。白村江での打撃に鑑み騎馬軍団を建て直そうとした大和朝廷は、ことによるとアムールランドから北海道経由で蝦夷地に入った中型馬に望みを託して蝦夷征伐をくりかえしたのだろう。それ以前の西南日本では小型馬だったろう。日本ではまともな騎馬戦として武士階級が興つたのは、この文化的事件のおかげかもしれない。

アムールランド的な魂は、前九年後三年の役の阿部・清原一族、そして藤原秀衡にまで受け継がれたと見よう。すると、この蝦夷的スポーツ性を遺憾なく発揮した最大の名士は、源義経ということになる。一ノ谷・屋島・壇ノ浦を貫く闘いぶり、若かりし日に蝦夷との闘いで身につけたもので、鈍重な東国武士のものではない。

なお、縄文期には蝦夷と同類だった山岳民も、蝦夷に似た純情・豪胆・スポーツ性を備えていたようだ。その故に隼人と共に国標や蝦夷は近衛軍団に備われた。そのスポーツ性を発揮した最大の名士は楠木正成だろう。

支配と慣行と規則と

河合秀和 学習院大学法学部教授 小松左京部会

私は犬を飼っていて、この犬をいつ、いかなる状況でも私の命令に服従するよう訓練したいと思っている。できれば命令がなくても私に服従し、私のやって欲しくないことはやらないし、私のやって欲しいと思っていることは進んでやってくれるようにしたい。つまりは、私の意志と利益に完全に従わせたい。そのような服従の習慣を覚えさせたいのだ。

この習慣は犬の方の習慣だが、それとは別に私と犬との間にいつしかいくつかの習慣が成立している。朝夕、大体きまつた時間に散歩に出かけることとか、ある街角ではきまつて右に曲るとか、河原のある部分では犬が自然の要求を満たそうとかの習慣である。これはいわば私と犬との間の共通の習慣で、ともにそれに従っている。

とがある。きまつて右に曲る街角では、自分から先に曲ろうとする。犬は私の左側を歩いているから、勝手に右折されると私はけつまずくことになる。これは困ったことだ。私の左ひざより前に犬の肩を出させてはならぬという訓練の要諦にも反する。そこで無理に左曲りをさせると、げげんな顔をして私を見つめる。きまつた場所へくると、私の許可を得ないでさつさと排便することもある。総じて、私の習慣違反にたいしては、反抗とまではいかななくても、少なくとも異議を申し立てるといった様子をする。私にたいして習慣通り行動するよう要求することが、犬の方の権利として意識されているらしい。らしいというのは、それ以上正確には判らないからである。

ここまで書いたところで、私はすでに三つの意味で「習慣」という言葉を使っただようである。第一は、私の側の「支配」に見合うものとしての、犬の側の習慣である。第二は、私と犬の間の「慣行」である。第三は、この慣行違反に抗議する場合で、この場合は慣行というより「規則」といった意味に近い。この三つ、「支配」と「慣行」と「規則」はいずれも英語の「ルール」という一語で表現できるというのも、面白い事実である。

さて、私の側の「支配」を「慣行」として成立させると、私は犬の「規則」違反を罰することができるようになる。罰の意味が犬にも理解されるようになり、服従の習慣を強めていくことができるであろう。逆に犬の側から見た場合、服従の「慣行」に私が反した場合、「規則」の名によって私に習慣への服従を要求することになっている。少なくとも一部、私の支配者としての位置は、服従者に逆転している。

この関係をつきつめていくと、支配するものが服従し、服従するものが支配するという逆説が現れてくるはずだが、これを今展開する紙幅はない。ただ一点明らかなのは、支配―慣行―規則という関連での支配は、決して私の恣意的支配ではなく、常に慣行への方向をもった支配であるという点である。

もちろん私としても、慣行に従っておく方が楽である。完全に服従させようとした最初の目標に反することになるが、もともと完全な支配などというものは、専制君主の夢の中でしか存在しないのかもしれない。私が恣意的であろうとすれば、私は習慣を持つてはならなくなるであろう。たとえそれが、「朝起きる」といった単純な習慣であっても、それを持つてはならぬとなれば大変である。

明朝の皇帝は、『満漢図録』に残っているように、同じ物を二度と食べないことになっていたらしい。恣意は慣習化してはならぬという命題をいかにも象徴的に現わしている。料理人の苦勞も大変だったであろうが、一度喰った旨い物を二度と喰えない皇帝にもいくらか同情したくなる。

これから先、支配などといったものはどうなるのかを考えながら、犬と散歩して思いついたことである。

21世紀の落ちこぼれ族

五代利矢子

評論家 茅誠司部会

最近、アメリカの家庭では、子どもたちをサマーキャンプならぬ「コンピューター・キャンプ」に送り出すことが多くなってきた。野山を走り廻って汗を流し、夜はキャンプファイヤーを囲むといった従来のものにコンピューターが加味されて、午前中はインストラクターからみっちり講習を受け、午後は野外に飛び出すといった具合である。自由時間ともしなれば、子どもたちは一斉にコンピューターのある部屋に集まって来て、思い思いのプログラミングを作成することに熱中し、まさにコンピューターで遊んでいるという。

日本でも、東京・秋葉原の電気屋さんの並ぶあたりには、コンピューターの教室があつて、日曜日になると子どもたちが沢山集まって来、なれた手付きであれこれと操作し、終日楽しんでいるという記事を読んだことがある。

この六月、半月ばかり北米を廻ったが、ホテルや街のレストランのレジにマイコンが設置され、レジの女性が難なくキキを叩いているのが目についた。昨年の一月に渡米した時はあまり見なかったような気がする。間もなく日本でもこうした光景があちこちで見られるのかも知れない。

わが家でも、今年の春からマイコンを入れて家計簿がわりに使っているが、とても子どもたちのようにいそいそというわけにはいかず、宿題を解くような気分で、四苦八苦しながら使っている。むしろ、お客の見えた時、ゲームのプログラムを入れて、スロットマシンやバックマシ等を座興で楽しむことが多い。しかし、そのバックマンも、少しでも点を稼ごうと肩に力を入れて続けていたら、頭がぐらぐらして来て思わずソファに倒れ込むように座ったまま目をおさえる始

末で、若い人たちに哀れまれた。子どもは短時間でなれて、私からみれば驚くべく点数をあげている。

間もなく高齢化社会を迎え、六十五歳以上の年配者は増える一方という。しかも子どもの数は少ないから、極端な話、一人っ子同志が結婚すると四人の老親の面倒を見る必要が出て来るわけで、そうなれば、年老いてもできるだけ自分の事は自分でするという心構えでないと、若い世代は仕事や子育てでキリキリ舞っている最中だからまいってしまいかも知れない。技術革新によって住宅事情などもかなり変わって来ると予想されるので、機器の操作なども少しはなれておいて、或る部分は機器のたすけを借りることになると思う。すでに介護用のロボットなども試作されはじめているらしいが、スイッチを押しまちがえても困る。

先ごろ、二十一世紀型オートメ住宅が

登場したが、家中の冷暖房はもちろん、門やシャッターの開閉・換気・掃除に至るまでコントロールされているし、ガス漏れ・漏電・火災防止装置や防犯装置もセットされている。いずれはこうした住いにロボットも参加し、家事の肩代わりをしてくれるだろうし、情報のハイウェイが家庭と居間・台所に直結される。

しかし、エンジニアや機械大好き人間は別として、総じていまの年配者は機器に弱いというか、なじみが悪いような気がする。ビデオなども最近は大分家庭に入ってきたが、中年男性諸氏が、自分ではなぜかうまくセット出来ないの、今朝も頭を下げて子どもに野球中継を入れておくよう頼んで来たなどと苦笑まじりに話すのをよくきくし、年配の主婦は、家中がピカピカした機器に囲まれて事務所にいるみたいだし、スイッチを押すのがこわいと嘆く人もいる。

時代の流れがその方向に進むことは、人手がはぶけ、便利になって有難いと思う反面、それらが暮らしと上手になじむように、とりわけ年配者がストレスから心身症にならぬように、ソフト面の開発に一層力を入れて欲しいと願っている。「コンピューター ソフトがなければただのハコ」という言葉もあるのだから。

21世紀フォーラムについて

稲葉秀二

(財)産業研究所理事長・経済評論家 茅誠司部会

私は自分が21世紀フォーラムの部会メンバーに選ばれましたことを極めて光栄だと思っています。と同時に、私自身が「激動している日本経済、また世界経済」

さらにはその背後にあります日本と世界のなかでの政治や社会の動きのなかで、主として政府関係の各種エネルギー政策、構造不況産業対策、繊維産業の再編成、情報産業政策、航空や空港整備対策、さらには21世紀に向かって首都東京をどうしていくかの方策などの仕事に協力していますために、「公務優先」という日本的な習慣にひっぱられまして、フォーラムの部会の会合にあまり出席できないことを本当に申し分けなく思っています。このようなこともあり、私には以下のようなことを申し上げる資格はないと自認しています。と同時に申し上げねばならないという気持ちもまた深いのであります。そこで私に随想を書けといわれま

した今回の機会を利用していただいて、謝罪と同時にフォーラムへのお願いを申し上げることをお許し願いたいと思えます。

その一つはこうです。21世紀フォーラムもそのために生まれたのでしようが、上述したようないろいろな仕事、またその他の仕事に関係させていたいただいていることもありまして、「今日の日本は予想以上の大きな激動と転換のときに来ている」こういう感じを、私は次第に強く持つようになってきています。

まして戦後日本は廃墟のなかから再出発をしました。しかし今まで三十年と余の間に、これまで経済や産業は大きく復興、発展し、貿易は大きく伸び、国民生活は向上し、なおその上に戦前とちがって職業選択の自由と言論の自由とは世界一級に発揮されているような国になっています。しかし最近の世界や日本の動き

をみて感じるものは、「ここまで主流となつたわが日本ではありますけれども、ひよっとしますとこれからの日本は混乱と転換の過程に向かうようになるかもしれない」このようにすら私は感じるので「もつともこれが日本の有識者の多数の見解だというわけではありません。」

本フォーラムは、日本の各界の代表者といわれる方々をメンバーとして持つており、かつ七つの部会で、日本と世界についていろいろな重要問題を検討しておられます。私が申し上げたいのは、上述したようにこれから大きく日本と世界が変わりつつあるとするならば、これらの重要問題の背後は、別々ではなく、それぞれつながっているのです。「従って大事なのは単一の方程式を解くことではなく、「連立方程式」を解くことでなければならぬ」のではないのでしょうか。そうでないとバラバラでしか問題は解けないし、

真の効果はあがりません。日本もまた駄目になってしまいうように思うのです。

若干思いつめた発言だと思われるかもしれませんが。私の21世紀フォーラムに望みたいのは、それぞれの部会で中間のとりまとめをするとともに、連立的方程式を解くために、相互の関連性を考慮して連立方程式を解くための組織をフォーラムのなかにつくり、これを解くことに努力するとともに、そのことを日本の国民大衆に向かって訴えていただきたいことでもあります。

またあまりにペダンチックになりすぎることに注意を払っていただきたいと思います。

21世紀コラム◆

◆FORUMS

FORUM

ハラ七分の思想

岸田純之助

朝日新聞社論説主幹

伊藤善市

東京女子大学教授

高原須美子

評論家II茅誠司部会

いま何故「ハラ七分」の思想なのか

岸田 満腹状態というのは、もうそれ以上

んじゃないでしょうか。

は食べられないんですから、はっきり判りま

すね。明治からの百年間、日本はほどよいハ

分なのかよく判らない。これは食べる物だけ

ングリーと時々度をこしたハングリーを発

でなく、あらゆる場合にそうであって、企業

展のエンジンとしてやってきたため、貧乏性

にしても能力一杯で頑張っている。そうしな

が骨身に染みついたようなところがある。国

いと他社との競争に破れるということもある

際的にも、豊かな社会にはそれにふさわしい

うが、可能ならば自社が先頭に立ちたいとい

行動様式があるし、いつまでも家庭の事情が

う欲望もある。こうしたことが、多分、企業

あるから、ということを書いてひんしゆくを

でも国家でも人間でもあるはずです。猛烈に

買うのは、あまり賢いことではないと思う。

腹一杯頑張ることは出来ても、欲望を抑制し

また先日 of 国民生活白書では、人びとは満腹

て七分に押さえることは非常に難しいと思

したとは言っていない。いったん上がった生活

んです。だがこの難しい問題にいま取り組ま

の質を維持するために、実質的な所得減少部

なければならぬ。これは日本だけの課題で

分を奥さんが働いてカバーするということな

はなく、世界中、同じ問題にぶつかっている

どは、決してまだマチュリティに達してない

という一つの表現かもしれませんが。日本の場

合、フローとしての所得や消費水準は高まっ

たが、ストックの面とのアンバランスが目

つきますし、それが発展のエンジンとして、

まだ必要なとも言える。それから、この

テーマをみて孔子の「過ぎたるは及ばざるが

ごとし」という言葉を思い出したんですが、

いま日本列島の地域開発に関しては、東京、

大阪は明らかに過ぎたところであって、東

北、南九州その他では及んでいない。過ぎた

るところと及ばざるところが併存しているん

です。家康は「及ばざるは過ぎたるに勝れ

ではなく、ものによりけりだと思います。

高原 いまの日本では、腹八分は健康にいいんだと非常に積極的に評価していますが、昔の腹八分というのは、十分に食べられないから八分で抑え込まざるを得なかった面もあったんじゃないでしょうか。無ければ八分に納めざるを得ませんが、十分あるものを八分なかならず七分で抑えるのは自分の意志でやるよりない。自から意志を働かせて抑え込むというのは大変難しいことですね。とく

限られた資源の配分バランスの是正

岸田 これは別に八〇年代に入ってから出てきた課題ではない。たとえばローマクラブの「成長の限界」……、最初に「ゼロ成長」と書いたので方々から反撃もありましたが、あれは腹七分を逆の側から表現した言葉ですね。従来先進国は、無限のフロンティアがあるという幻想のもとに発展を進めてきた。しかし、限られた地球上ですべての人類に対し、さまざまな資源の公平な配分を実現しようとなると、具体的には先進国は低成長、つまり腹七、八分でやめる。高原さんの話に出た沢山の飢えた人々を救うためにも、コントロールの可能性を持った社会はそれぞれ節度を持って自己抑制しなくてはいけないということでしょう。急成長した日本を見直す問題も勿論あるが、米国、欧州も含めて全ての先進国が直面している課題です。その解決の

に日本の場合、長い歴史のなかで、はじめて飢えを知らない世代が現れ、増えていますから、その一方、ユニセフの児童白書（一九八一年）をみますと、ユニセフが活動している地域の十億人の児童のうち四分の一が栄養失調であり、一日四万人の児童が死んでいく。そうした事実を考えると、意志を働かせて、腹八分あるいは七分にすることは、地球的な規模で必要なのではないかなと考えるわけです。

ために毎年、主要先進国首脳会議を開いて相談しているともいえるのではないかと。

伊藤 食料、人口、資源、経済活動の能力が各国平等に賦存されていないので、先進国と発展途上国との経済的格差は激しい。しかし一方、南北の人口増加率を比べてみると、北のほうでは割と上手にコントロールされて

いるが、南のほうは猛烈な勢いで伸びている。もう少し抑えられるのではという説もある。しかし、北の方は一人当たり消費の絶対量が多い。北は南の人口一人当たり消費量の何倍も資源とエネルギーを消費しているのだから、実際はもつと責任が重いという感じもするわけです。また、経済成長をみた場合、国によって巧拙がありますよね。日本のようにポテンシャルを持つ国は、もつと成長してもかまわない。問題は、その成長成果をどう配分するかです。現在のためにみんな食ってしまおうか。将来の生活をより一層高めるために貯めておくか。あるいは発展途上国とか困っている国のために協力するというかたちで使うこともできる。ひと昔前に「くたばれGNP」というのが論議されましたが、私は成長し得るものをただ感情的に止めるという見方には批判的でした。経済が成長しようがしまいが、資源配分の仕組みを変えなければ、環境容量と

人間活動のアンバランスは少しも是正されないわけです。いまは、まさにお望み通りに成長がくたばってしまったわけだが、税金が入らずに公共活動が沈滞するなど、あらゆる面で問題が出ている。重要なのは資源配分のアンバランスの是正です。困った人のことを考えて、一律に成長を止めましょうというのは私はとらない。

岸田 いくつかの局面があると思うんです。地球という限界の中で、四十五億の人間が全体として、さらに豊かさを増していくような歩みをとるために、どう工夫していかなければならないか。フロンティアが無くなってきたことに関連しますが、以前に増して強まってきた先進国間の摩擦をどんな仕組みで解決するか。また、日本の国内で、いかに全体としてバランスとか社会的な公正を確保しているか。そうした課題が腹七分の思想ということとまとめて表現されるわけです。

伊藤 経済も人間と同じで、伸び盛りの時期もあれば質的な充実を求める時期もあると思う。ですから適度の経済成長は望ましいことです。昭和三十年代から四十年代にかけての経済成長は、おそらく国民的な支持を得ていた。なぜ支持されたか……。たしかに生活水準が実質的に年一〇%ぐらいずつ上がって行くんですから、成長とはいいいものだと感じるのは当然ですが、もう一つはやはり甲斐のある仕事が増えていったことです。新しい仕



■岸田純之助■

事が増えて、やる気のある連中は非常に愉快でたまらなかつたと思うんです。平たくいえば、社長も部長も課長も増えたし、新しいプロジェクトも次々に発足した。本人はもちろん、家族も愉快だつたでしょう。たしかに腹七分も結構ですし、資源の制約、地球的な規模、国際関係なども考えなくてはなりません。が、低成長であり腹七分であっても、なにか未来に対してチャレンジしたい人々の仕事も全部一律に減るのではなく、質的に充実したかたちを持つ構造変化で行きたいですね。いまの日本にはヤル気のある連中がかなりいま

皆が公平と思える社会のシステムを

高原 私も経済成長の段階は人間の成長とかなり似かよっていると考えていました。後進国は乳幼児みたいなものでなかなか一人立ちできない。中進国はいろいろと生産・消費してどんどん成長していく時期だと思ふし。先進国は成熟社会と言われるように、人間で言えば熟年に入り、もう成長しないでそれを維持していくかたちですね。日本は先進国の仲間入りして、かなり成熟しているんじゃないでしょうか。ところが日本人一般はマスコミも含めて、豊かになった、腹一杯になったことを認めたがりませんね。先日の国民生活白書にも、消費の意欲はまだまだ強いと書いていますが、私は、もう物の面では充足されて熟年期に入っていると思う。その辺をはつ

すから、その志を満たしてやりたい。



■伊藤善市

きり認識すると、当然、成長は落ちざるを得ないし、生活の面での目標も変わってくると思います。腹は七分にして、よく言われる生活の質の向上とか物離れした精神生活の充実に変えていかざるを得ないし、また、われわれの生活自体もそつちへ向かっているのではないですか。

岸田 国家間の関係にしる国内での問題にして、自分が豊かになることで、他人をイライラさせたり貧しくしたりしない工夫が必要になった。たとえば、一つの技術的な手法が開発された場合、その利便を大きく受ける人と受けない人との格差が増大する可能性をねに持っている。技術が発展し、受け取る利便が非常に大きくなったために、その格差が

ますます開いてしまったのが今日の先進社会の非常に顕著な特徴なんです。鉄道でいえば、在来線よりも新幹線のほうが利便を受ける受けないの差が激しい。医学も発展し、これまで助からなかった患者も助かるようになった。その患者については喜ばしいんですが、莫大

自由と節度をわきまえた成熟思考で

な医療費は他の人が負担することになる。この利便の分配を公平にするには多くの場合、技術よりも制度でやるんですが、この公平さがどれだけ確保されているかで豊かさが測られるような状況がでてきた。つまり、絶対的な豊かさではなく、社会の面で相対的に自分だけが取り残されていないというのが、たいへん大事なことです。本当は六分でも七分でも八分でもいい。全体として皆が公平だと思える社会の仕組みを作ることが、日本だけではないけどの先進国もがぶつかっている課題だと思ふ。

高原 ある人は十二分に食べ、ある人は五ということではなく、みんな平均に七、八分ぐらいで公平にということですね。

岸田 能力のある人は、たとえ能力分だけの報酬をもらわなくても、その能力を発揮できることで満足を感じられるはずなんです。だから能力ある人はそれだけの義務とか責任を果たすんだ。能力のある企業はその収益によって、能力に応じた責任と義務を果たす気持で、いかにして全体を豊かにするか考える。つまり、社会的な公正が、いつでも能力に応じた分だけ深く考えられていなくてはいけない。そういう社会になったんです。

伊藤 テレビ、ラジオ、新聞などのメディアアが発達し、いわゆる情報化社会になったし、多くの人びとが高等教育を受けている今日では、不平とか不公平感を非常にビビッドに感じますね。福田恒存さんは「民主主義思想は警戒思想だ」という。自分の知らない間に誰かが巧くやっているのではないか……、というのが底流としてあるんだそうです。いままさに、そうした被害者意識が強まっているのであれば、やはりふんだんに情報を出し、おかしな兆候が出たらフィードバックし、タイムリーな軌道修正をすることが大切ですね。

ところが制度とか法律は、いったん決まるとなかなか直らない。ですから法律も制度も出来た時が一番ホットで、あとは永久に陳腐化の運命にあると思って、運営の仕方でもフレキシブルに対応できるようなシステムをとることを皆がよしとするような社会でないと、公平のための軌道修正もうまくいかないわけです。

岸田 私たちは自由な社会に生きていますが、それぞれの人の自由な活動が満たされるためには、自分の自由とともに他人の自由も認めなくてはならない。自由な社会に必要なことは、自由と節度が表裏一体で存在していることなんです。自由の大きさにふさわしいだけの節度の大きさを求められる。だから相手の自由を認めるためには、自分の節度と相手の節度の両方が出てこなくてははいけません。これが腹七分の思想の重要な根幹の一つです。そうしたことを全部含めて、お互いに必要な変更を加え、お互いに規制しあっていく、そうした社会を作ることが必要ですね。またフレキシブルであり、軌道修正したりするために必要な情報が、以前よりももっと広い範囲で利用可能になっていなくてはならないという要求も出てきます。もう一つ、被害者意識というのは、みんな自分の角度でものを見るから、そうした気持ちになりがちなんです。そこから出てくるのが米国などと言う、シングルス・イシュー・ポリティックス、俺の身の回

りで大切なのはこれだけと、ただ一つの政策だけをにかけて議員になり、議会でもそれだけを主張する。しかし、本当は全体を見る必要がある。複雑に入り組んだあらゆる問題の、何処をいじれば何処がマイナスになるかを、お互いに理解し合って政策を実行していくような、いわばものの考え方の成熟が必要な社会になっていくわけです。ところが、もの

価値観の多様化と新しい価値尺度

高原 制度的な面からみると、公平さを欠くというのは大変大きな問題であり、直していかなければならないと思いますが、一方でこれからの社会というのは、人によっても大きく差がつく、むしろつけなくてははいけません。成長期には、隣りの車が小さく見えるというCMが当たったように、みんな同じパターンで物の豊かさを

ほど難しい。経済は成熟して豊かになったが、ものの考え方は必ずしも豊かになっていない。自分が悪いのじゃなく相手が悪いと考える。レーガンの米国のように米社会全体がうまくいかないのはソビエトのせいだ、あるいは日本だということになる。そうではなく、寛容になり、辛抱強くある程度時間をかけて、一つ一つの問題の解決に当らなければいけない。これも腹七分の思想の重要な側面ですね。

追いかけていった。その間に経済的な面では平等というか公平さがかなり進んでいった。しかし、これからは自分の価値観であるとか、自分の考えを持つことによって、生活の面からみるとかなり差がついていく社会ではないでしょうか。物質的な豊かさを求める人もいれば、精神的な豊かさを求める人もいます。そこで満足する人も、あるいは自然に戻る人も

いるといった形で非常に差がつく。そうした差というものを、積極的に評価できる社会が腹七、八分の社会ではないかという気がするんです。成長社会で平等化を進め、ものの面では同じスタートに立って、これからは違った意味で自分の生活を充実させていくのです。

岸田 そうすると皆が神様にならなくてはいけないというすごく難しい問題も出てきますね。ところが皆が神様になれないから、本当に充実感を持って暮らすことが出来る仕組みがないと困ってしまうわけです。たとえば、いまは学歴社会で、小学校を出るころには将来の順序がだいたい決まってしまう。それで満足しろといっても出来ないから、落ちこぼれたり非行に走る現象が出てくる。それらの人々にも十分に満足感を持って暮らしていくことが出来るような社会の知恵なり仕組みを作る……。それは大変むづかしい課題です。

伊藤 それは大きな問題ですね。腹七分の思想が問題になる豊かな社会は、ショッピングでも、自分の進路でも、また、いろいろな価値観についても選択の自由度が大幅に拡大している社会だ。価値の多元化化社会などとも言われまして、貧しい時期、あるいは高度成長期の、量的に測って、彼は十、私はまだ三つといった量的な格差ではなく、かつて格差と騒いだものを個性としたかたちで受けとめているかもしれない。地方には東京の便利さはないが、のんびりとして健康にいいとか、



■ 高原須美子 ■

教育も明治からの先進国に追いつくための、早く、正確に、安く、たくさんものを買えさせる、というものから、生涯の各時期にそれぞれふさわしい教育を高いレベルで受けるのが望ましい、というふうになってきた。彼は英語を早く覚えるが駆けっことは俺のほうが早いとか、それぞれの個性や役割が相互に評価され、承認されるような仕組みになれば不満は減ってくると思う。早熟な人も大器晩成型の人もいて、一つの物差だけでなく、多面

他人の尺度を認めうる柔軟な態度を

伊藤 歴史の流れの中で評価されているものがいろいろある。古典的名著にしても、何々賞をもらったからというより、皆が良しとするものが残っている。演歌にしても膨大な数の中から、皆に愛され残ったのが名曲として残る。そうした歴史の風雪に耐えたものだけが残るといって物差ができていくのではないか。私はリベラルですから、そうしたものが自由に機能するような仕組みを残しておくことが大事じゃないかと思うんです。

岸田 歴史というのは時間がかかりますからね。歴史の物差ではなく、いま生きている人たちの満足感をどうやって実現するか、その物差はどうすれば可能なのか……。一つだけ言えるのは、自分の物差だけが正しいと考えるような態度をとらないことが大切です。自分の物差は自分の物差であって、他人のと

的な物差で立体的に測るんですよ。逆に言えば学校の教師も、すごく腕がよくなければ務まらなくなる。

岸田 物差をどれだけ増やせるかという点も、腹七分の社会では非常に重要なんです。これがまた難しい。測る側は大体、年長者とかが上の人でして、一般にそうした人は物の考え方が新しくなく、物差をたくさん持つ可能性が低い。

は違う。だから他人の物差を認めることです。先ほどいった節度というのは、そういうことなんです。

矛盾を絶えず解決する全体の身構え

岸田 高原さんの減量成功には大いに敬意を表します。と同時に、他のちよつと太目の人に減量しろと言わなくてもいい。減量しないで生きる権利も認めなくては(笑い)。

高原 さきほど腹七分の社会はすごく差のつく、個性の強い社会になるのではないかと

いったんですが、その実現は人並み意識の強い日本人にはかなり難しいかもしれませんね。以前、森有正さんに伺ったんですが、日本語には人稱が無いも同然だそうです。欧米の会話には必ず人種が出てきて、私はこう、お前さんはどうだというように、自分とあなた、

伊藤 その点、キリスト教文化圏というのは一神教だから、物差も単一になりやすい。イスラエルもそうじゃないかな。日本の場合

は八百万の神様で物差はたくさんあることになる(笑い)。高原さんは涙の出るような減量を意志の力でやったとか(笑い)。私なんか医者に十キロ減らせといわれる。しかし、僕なんか短足日本民族の典型ですよ。座高があつて内臓がたっぷり入っている。もう少し足が長ければ標準体重です。なにも八頭身の欧米人が開発した基準に従うことはない。これを医者に話したら、最近はそのように修正するケースが出てきたという。そのように世界に通ずるものと、日本人の平均値とは基準を違える必要がある面もある。

それに他人の違いがあり、個人とか主体性が確立されてある社会だという。伊藤さんは八百万の神がいるから日本は多様化できるとおっしゃるけど……。私、あなた、それに「ゼイ」をうまく使い分けられない中で、物差の多様化が難しいのは事実ですね。伊藤 人は人、自分は自分、が併存することなんです。ユックリズムというのがありまして、それはそれなりの文明批評だと思つて、しかし、他の人が速く行きたいというのを、けしからんと言うのは独裁者の発想だ。米ソ両大国があちこちで摩擦を起こしひんしゅく

を買っているのも、自分が正しい、お前も俺と同じようにしろという独裁者の発想によるものです。冗談じゃない。ですから、速くもゆっくりも行ける選択の幅があるのが、腹七分の思想だと思います。

岸田 ただし書きを一つ、たとえば東北新幹線が出来るまで以前の東北本線に乗りたくても無くなっている。新幹線にどうしても乗らざるを得ないような列車ダイヤが組まれている。つまり、選ばなくても、消されてしまう問題がある。

高原 東北新幹線は盛岡で止まっちゃ。先曰、青森では皆、あんなもの絶対乗らないと怒り狂っている。恩恵があるどころか、逆に不便になっちゃっているわけですね。伊藤 象徴的です。私は山形県人だから、典型的にその被害を受けていますよ。

岸田 ですから、そうした状況があることを前提において、絶えず、いかにして皆に公平にするにはどうすべきかを追加していく身構えが、全体にないといけないのではないかと

思うんです。

人間社会と第三の火

向坊 隆

五代利矢子

原子力委員会委員長代理 前東京大学総長
21世紀フォーラム発起人

評論家
茅誠司部会

十一のバランスの上で地道に開発

五代 さきの原子力白書によりますと、四半世紀を迎えた原子力発電は、現在運転中のものが二十四基。五十六年度の総発電電力量の一七%を占めている。一般家庭でも原子の火を利用しているということですね。世論調査などを見ても、三分の二の人々が原子力発電は不可欠だろうと考えている。しかし、一方不安のほうも増大しているというのが私ども一般の実態だと思えます。そこで最初に、第三の火と言われる原子力発電の特性——こ

れがいろいろ難しい問題にもつながるんでしようが——について簡単におうかがいしたいんですが。

向坊 燃える物一グラム当たり莫大なエネルギーが取り出せることがプラスの特性にかかわっているわけです。たとえば、日本では百二十日分の石油燃料を備蓄するのに大変な騒ぎですが、原子力の場合ですと炉内の燃料だけでも一年分はある。燃料加工工場にある分やその他を合計すると、三年分ぐらいは

もう備蓄していることになる。備蓄が非常に容易なんですね。また、ウラン原料のイエローケーキ一万吨は石油一億トン分位に相当するでしょうから、輸送の手間がまるで省ける。輸入のための外貨も石油の七分の一で済むそうです。

一方、悪いほうの特性もある。燃えた後に非常に放射性の強い物質が同じぐらいの重さだけたまるんです。ですから、それを環境に放出しない安全性について、他のエネルギー発生法にはみられない厳しさが要求される。今後の技術開発によっては、現在の百倍ぐら

いのウランの利用効率を高めうる可能性を持っていますが、放射性物質の放出を防ぐにも非常に努力がされています。そのプラスとマイナスとのバランスの上で地道に開発の規模を増やしているのが現状です。

五代 原子力が一般の人に理解しにくいというのも特性の一つになりますね。石油ですら燃やすというイメージがありますが、原子力の場合、放射性物質をどの程度閉じ込めたら安全なのかとか……。

向坊 確かにそうです。——大ざっぱに言って四重ぐらいの安全システムがかかって

いる。第一に、装置自体に何重もの安全をかけている。第二に、それでも放射性物質が少しでも漏れてきたら、人間に害を与えるよりもずっと早い状況で検出して原因を追求する検出のシステムが張りめぐらされている。第三には、いくら安全な機械だといっても、動かすのは人間ですから、人間がしっかりとつまい、人間の訓練を非常に丁寧に行うこと

によって安全を守るわけです。第四には、国や自治体が安全規制の体制を整えている。計画の段階から審査をして、建設、稼動……と、安全性をチェックするわけです。

五代 原子力そのものが安全だというのではなく、その危険な部分を熟知して、人間の知恵で危険を閉じ込めるといふ意味の安全性ですね。この前の敦賀の事故のときにも、あ

のあと必要と認められたら県が立ち入り調査する条例とか、浜岡でも、いつでもどこでも立ち入りできるという、地域との協定も新しくできたそうですね。

向坊 実は、そうした規制の権限は国にあり、地方自治体は持っていないんですが、自治体が独自に企業と協定を結ぶことによって、安全を監視できるようになっている。

燃やすだけでは勿体ない石油資源

五代 地域の目もすっかり届くということですね。——つぎに原子力発電の経済性の問題なんですが、一般の新聞情報では普通電力が一キロワット十九〜二十円、原子力の場合

は十二円といった数値をみます。一方、また別の情報では、廃棄物処理まで全部含めたコスト計算をすれば、原子力発電はペイしないという意見もある。この辺いかがでしょう。

向坊 原子力委員会自身がそうしたコスト計算をしたことはありませんが、電力費については一番詳しい通産省の発表では、たしかに石油・天然ガスが十九〜二十円、石炭が十五円、原子力が十一〜十二円です。われわれの了解しているところでは、このコストには使用済み燃料の処理費用⇨再処理費用まで入っている。しかし、再処理後のものや発電所で出た非常にレベルの低い放射能廃棄物を処分する費用は含まれていない。この費用は、

外国の経験を調べたりして通産省が試算した結果では、電力代換算で約一割……一円そこそこですから、それを足しても石炭より高くなるんじゃないといっています。

五代 経済的にも十分ペイするということですか。

向坊 原子力発電所をあれだけ作って、電力消費の二割近くも発電しているということ

は、電力会社も計算して経済的にペイするかと考えているんだと思いますよ。

五代 それに石油の需給もいづつどうなるか判りませんか。

向坊 それから、化学工業原料として石油ほど貴重なものはないんですよ。それを燃やしちゃって電気にするのは実にバカな話で、できるだけ燃やさないで化学原料として安く

核融合はまだまだ未来の人類の夢

五代 ところで、核融合になると公害も非常に少ないということで、最近よく一般の議論の中で、一気に核融合をといった声を聞きます。しかし、核融合は技術的に非常に難しいとか……。

向坊 天然では太陽、人工では水素爆弾が核融合のエネルギーです。簡単にいうと、温度を数億度に上げ、軽い原子を猛烈なスピードで衝突させると、核が一緒になりエネルギーを出す。この核融合で出るのは、現在の核分裂と一グラム当りに同程度の大変なエネルギーです。このエネルギーを爆弾のように一気に放出するのではなく、必要に応じてコントロールしながら取り出そうとしているの

供給できれば、国民生活のうえからもはるかに有効なわけです。また、石油を大量消費しているのは、米国をはじめとする日本も含めた一部の先進国だけです。「先進国の発電は原子力でまかない、石油はなるべく余してこちらに回せ」といった議論が国際会議の席上で発展途上国から出されている。つまりいろんな意味で、石油資源の枯渇うんぬんよりも、石油消費をなるべくひかえるべきだというのが国際世論になりつつある。

ですが、コントロールできる状態で一億度を實現するのが大変むずかしい。現在は千万度とか二千万度を非常に短時間ポンと實現できる程度なんです。現在使われている核分裂を人間がコントロールして、原子炉の形で實現したのは一九四二年十二月シカゴ大学においてです。それが発電用として実用の域に達するのに二、三十年かかっている。われわれは実用の域に入ったと思ってますが、未だ発展中で完成した技術ではないという見方もあるぐらいです。それが核融合の場合、そのシカゴ大学の原子炉に相当するものすら、まだ出ていない。世界中で競争して実現の努力をしており、日本での研究も最近急速に進んで、



米国、全欧州、ソ連、日本という世界四大グループの一角を占めるようになったのですが、いつ実現出来るかは判らない。樂觀的な人は八〇年代にはと言っていますが、仮にそれが出来ても、実用の段階になるまでそれから何年かかるか誰にも判らない。うまくいけば莫大なエネルギーが取れるので研究開発しているんですが、今世紀中に実用化することはまずないでしょう。

五代 二〇三〇年という説がありますが何の根拠もないわけですか。

向坊 必ずしもないんです。それに、クリーンであるとも言えない。トリチウムという放

射性物質を使いますし、使用済み燃料は出ないにしても、中性子が現在の原子炉よりも一ケタ以上出て核融合の容器自身が放射性廃棄物としてたまってくる。

五代 話がすぐ核融合に飛んで、いかにもそこに理想的なエネルギー抽出が可能かなような感じなんですがね……。

向坊 人類の夢の一つなんです。もつと

日本の原子炉技術は世界最高レベル

放射物質を使いますし、使用済み燃料は出ないにしても、中性子が現在の原子炉よりも一ケタ以上出て核融合の容器自身が放射性廃棄物としてたまってくる。

五代 話がすぐ核融合に飛んで、いかにもそこに理想的なエネルギー抽出が可能かなような感じなんですがね……。

向坊 人類の夢の一つなんです。もつと

先の夢を言えば、いま人類が使っているエネルギー総量の一万倍は降っているという太陽エネルギーを大量に使えば、他のエネルギーを工夫する必要はないんです。しかしそれは技術的にも経済的にも大変難かしくて、実用までに長期間が必要です。そうなるまでに、手持ちのエネルギーでどうやって持たすかということです。石油・天然ガスはなるべく化学工業のほうに使いたんですが、エネルギー源としても、まだ相当期間使います。次に続くのが、石油の一ケタ以上はあるだろうという石炭です。しかし、公害防止の見地まで入れると、大量に石炭を使うのは簡単なことではないんです。

五代 石炭液化化というのはどうなんでしょう。

向坊 液体の石油と比べ、固体の石炭は輸送・貯蔵の面で不利であるため液化しようというんです。実験室では前からできています。ですが、大変難しい技術でして、経済性が成り立つのはまだ相当先なんです。

向坊 ご承知のように、わが国で使用するウランは全部輸入ですから、なるべく有効に使いたいわけで、それには原子炉の中で燃え

ないウランから出来るプルトニウムを燃す工夫をしたい。それには高速増殖炉が一番有利なんです。日本での実験炉も成功してますし、フランスでは大規模な発電炉が動いている。しかし、まだコストが高くて実用化できないし、そのための研究開発も遅れがちです。で、これが実用化されるまでは、今の軽水炉に少しずつ入れたり、ATR（新型転換炉）という日本独自の技術で開発中の原子炉で燃やしたりしてプルトニウムを使用できるようにしようというのです。ウラン資源の豊富なカナダなどでは、そんな面倒なことをしなくても、ウランを一回使っただけで十分経済性は成り立つと言ってるんですがね。

五代 わが国は人形峠の……微々たるものしかない（笑）。

向坊 遠い将来にはウランよりも豊富といわれるトリウムが使えるように、大学などで基礎研究を進めてはいるんですよ。

五代 以前のわが国の原子力発電は、海外の技術をそのまま借りて行なわれてきたようなんですが、最近では九八％国産化されたとかうかがいますが。

向坊 特殊な一部の部品、ライセンス料などを除くと、実質的には一〇〇％日本で作っている。しかも、国産炉のほうが輸入炉よりもずっと稼働率が高い。日本の技術が非常に



進んできたことは確かです。

五代 すると、これからは日本の技術を輸出することも有り得る……。

向坊 将来は有り得るかもしれないが、面倒な問題もありません。まず炉体だけを買う国はない。ウラン燃料つきで使用済み燃料の処理まで責任をもつセットでなければ駄目なんです。核兵器保持国の増加防止という世界的な動きもあり、日本が簡単に核燃料サービスタツキで輸出するといっても、それに対してどんな国際的 management がかかるか判りません。

また現在の原子炉はコスト低減のため一基百万キロワットの規模に大型化している。故障

や保守で運転停止することを考えると、一般

に一基の発電能力は電力網の一割以内が望ましいとされています。千万キロワットの電力網を持ち、自国で原子炉を作れない発展途上国というのはあまりない(笑)。二、三十万キロワットなら買える国はあるだろうが、そうするとコストの安い小型炉の研究開発が必要になる。ま、先進国が国際協力で小型炉を安く供給できるようにしようという動きもあって、将来日本がそれに優れた技術で参加する可能性はありますがね。

五代 日本の原子炉技術が高レベルだとい

ているわけですか？

向坊 そうです。技術が低いと稼働率が悪い。数年前まで日本の稼働率は五〇%を割っていた。それが二、三年前から六割を越して

実績重ねて安全性への不信感を除く

五代 つぎに安全性の話に移りたいんですが、三年半前のスリーマイル島の事故は象徴的ですね。今まで原子力の安全は確保されて

いると思っていた人たちまでも、あの事故のニュースで、やはり危険だった……となったように思える。もう一つは、敦賀の場合ですが、原子力発電所の当事者たちは安全性にも通じている。そのあたりが逆に落し穴で、一般の人がびっくりするような事故にもあまり意識しなかった。安全性に対するギャップがあるようですね。

向坊 敦賀とスリーマイル島では事故のスケールがまるで違いますが、作業者の油断が事故の一因であった点は共通しています。スリーマイルの事故は世界中に衝撃を与え、日本でも他山の石として安全委員会を中心に徹底的に研究しまして、それによって日本の安全体制が一段と高まったわけです。

五代 しかし一度事故が起こると、不信感

きたんです。日本では政府の定期検査が年間

三カ月ぐらゐあるから、フルに動いても七五%にしかならない。それでなおかつ六二%というのは非常に高い数字です。

ことだから油断やチェックのミスがある。原子力の場合、起こってしまつてからではどうしようもないというわけです。その辺のチェック体制はどうなんでしょう。

向坊 日本の場合、詳しく聞いたらびっくりするほどの徹底した嚴重なチェック体制が敷かれています。しかも、作業者は年に何回か訓練センターで、事故の防止や起つたときの対処のしかたについての徹底的な訓練を受けます。以前からあるんですが、スリーマイル島以降、さらにチェック・システムは向上されていきます。まあ、考え得る万全の策は講じてあると思うんですけどね。

五代 その辺の安全性を一般の人には、どうやって伝えるか……。

向坊 出来るだけ多くの人びとにそうした状況を見てもらうとか、解説するという努力も必要ですが、一番肝心なのは、いかなる故障も起こさずに定期検査から定期検査までは完全に動かすという実績を積み重ねる以外には、一〇〇%の信頼性は得られないと思うん

です。何年も故障しないで動いていれば、自然に不信感はなくなっていくわけです。

五代 それから、原子力の問題でかならず議論になる再処理問題と廃棄物の処理——低レベルと高レベルの二通り。海洋投棄も国際摩擦を起こしてますが……。

向坊 再処理はコストの問題でして、経済性を無視すればやれる。しかし、経済性は無視できないのでだんだんに技術開発していく。多少日本の計画が遅れがちですが必ずやれます。廃棄物については、まず、放射性は非常に弱い大量に出てくる低レベルについては減容処理技術が進みまして、量が以前の数分の一に減っている。燃やせるものは燃やして灰にしたりプラスチックで小さく固めこんだりするわけです。このまま進めば、原子炉の寿命まで発電所内で保管しても周囲に放射性被害を出す心配はないといわれていますが、周辺の人々の不安とか約束のため、なんとか処分しなければならぬ。原子力委員会の方針は、陸地処分と海洋処分の両方向で努力しますということです。海洋処分については国際規約もあり、十数年前から詳細な研究開発をやり、海洋の深い所に安全に棄てる自信は得られています。漁業者とか太平洋の島の人びとの反対を押し切ってまでやることは出来ない。しかしあきらめないで説得の努力

を続けているわけです。陸地処分については、

これまでも発電所内にドラム缶で置いてあるわけですから、すでに二十年の経験がある。適当な場所さえ得られれば安全に保管できる。ですから低レベルについては遠くない将来に

一〇〇%といえないかもしれないが問題は解決に向かって動き出すと期待しています。高レベル廃棄物は非常に強い放射能を持つ

信頼結ぶにはオープンな情報交換を

五代 ただ、それでも一般の人たちにして

みれば非常に不安だという気持ちがありますから、先ほどの実績を作ることも大切ですが、いろんな要素がある程度は知らないといけない。これまでの情報の流れをみると、メリット、デメリットが正確に伝わって、われわれがそれで判断するという手続きが、足りなかったのではないかと。安全だ、安全だという情報ばかりくる。ですから、逆に何かあると「ほらみなさい」というかたちになるんですね。たとえば、低レベル廃棄物が完全に安全に閉じこめてあるなら、ある意味では見える所にあつてもいいわけですが、何かそれを人目にふれないように隠すみたいなのがありますね。メリット情報と並行してデメリット情報も出してほしい。それでないと信頼関係は結ばれないと思うんですよ。

ているので、環境にばらまかれるようなことは絶対に防がなければいけない。しかし、幸いなことに非常に少量であつて、今のところ

政府の責任において厳重に監視つきで保管されている。まあ、そのまま増えていっても困るので、ガラスや瀬戸物のような水に溶けない形に固めてしっかりした岩盤の中に埋めようという計画で研究開発を進めています。

向坊 起り得る故障はある程度予想できるわけですから、それを予め発表し、しかし

こうした対策をとりますから皆さんに迷惑は及びませんという徹底した解説が必要ですね。

五代 ところで非常な極論をしますと、危険な原子力発電などに頼らないで、エネルギー消費を少なくし暮しの向きを変えようという哲学といいますか、そうした考えがあります。どう感じになりますか。

向坊 やはり人間、一度薬をすると元に戻るのには難しいわけです。薬するというのはエネルギーを使うんですよ。これまで日本人は生活レベルの向上に努力した結果、一人当たり米国の二・五分の一のエネルギーを消費するようにまでなつた。しかし日本のエネルギー消費は産業が六割ですからいわゆる民生用は米国の五分の一程度。米国のみに薬する

には現在の五倍のエネルギーが必要になる。

省エネに関しては日本は世界の優等生ですが、その努力にも限度がある。また開発途上国のエネルギー需要が急速に増えてくると大ごとです。計算してみると原子力なんか逆立ちしたって間に合わない。そうなると先進国が生産水準を下げる以外方法はないんですが、生産水準を下げるというのは非常に難しい。ですから下げないで、あるいは上げながらエネルギーや資源を使わないようにするにはどうすればいいかというのが、これからの課題ですね。

五代 やはり太陽エネルギー利用時代までのつなぎの部分は原子力に頼ることになるのでしょうか。頼る以上は担当する人びとは安全性を守ることを完璧に遂行して欲しいし、私たちがどうやって安全性が保持されているのかを見守り、理解する——ということでしょうね。

向坊 原子力は安全が破れたら全部壊滅ですよ。

最近の日米間のエネルギー問題

はじめに

最近の日米間の問題について、貿易・防衛・経済(米国の高金利・ドル高)・先端技術など、毎日ニュースとならぬ日はない程です。

日米間のエネルギー問題について、十一月十七、十八日の二日間、ワシントンに於て、日米両国の民間代表によって国際会議が開催される。日本側は、エネルギー総合推進委員会内に設置された日米エネルギー関係特別委員会代表(中山賀博団長)であり、米国側は、大西洋協議会エネルギー政策委員会代表(ジョン・E・グレイ団長)である。日米双方共約二十五名ずつ参加するが、筆者も事務局の一員として出席予定であり、この機会に最近の日米間のエネルギー問題をメモ風に整理してみたい。

日米エネルギー関係

係共同政策提言

今回の会議の日米両国の当事者は、昨年六月に日米エネルギー関係に関する共同研究を完了し、両国政府に政策提言を行なった。この政策提言は、次の認識のもとに行なわれた。即ち、日本と米国の間には、国内エネルギー事情の差異とともに、「世界の二大石油輸入国としての利害の一致」があるために、両国の全般的二国間関係に特別な問題と可能性を生じてくる。従って、米国と日本が、それぞ

れのエネルギー事情改善のために速やかに行動することが重要である。しかしかかる単独の努力に勝るとも劣らず重要なのは、両国が節約を含むあらゆるエネルギー対策について、「協力的かつ統合的アプローチ」をとることである。

共同政策提言の要点は、次の四点である。

(一) 石油

米国は、輸出管理法により、石油の輸出を禁止しているが、緊急時における米国産原油の対日輸出と政府保有備蓄の相互融通を検討すべきである。

平常時においても、アラスカ原油の日本へのスワップ輸出(中東・メキシコ原油などとスワップ)または売却を可能にすべきである。

(二) 石炭

日本が石油依存度を低減できるように、米国炭の対日輸出促進のため、米国は米国内のインフラ整備を行ない、日本は米国の石炭資源開発への投資を促進すべきである。

(三) 原子力

日本が原子力を十分に活用して、その石油消費量を削減することは、日本と米国の双方にとって有益なことである。米国は、日本が独自の核燃料サイクル確立(再処理・濃縮工場完成等)を望んでいることを十分認識、理解し、協力すべきである。

また、米国の原子力発電所立地規制改訂に当たっては日本や欧州に多大な影響

を与えることに留意し、改訂作業を進めるべきである。

(四) R & D 計画

米国と日本は、新エネルギー技術の研究、開発、実証および実用化のための積極的な共同計画を通じて、より長期的なエネルギー供給の安全保障のための協力を強化すべきである。

エネルギー情勢の

変化

共同政策提言の作業がなされた時期(一九八〇年から八一年前半)と現在を比べてみると、世界及び日米におけるエネルギー情勢が変化している。箇条書きにすると、次の通り。

(一) 世界の原油生産

一九七九年全世界の原油生産は六三三〇万バレル/日(以下BD)、自由世界四九〇万BD、内オベック三二〇万BD、非オベック一八〇万BDであった。

一九八二年一月から六月の実績では、

全世界の原油生産は五二二〇万BD、自由世界三八〇万BD、内オベック一八〇万BD、非オベック二〇〇万BDとなっている。

全世界の原油生産は三年連続の減少を示し、特にオベックの原油生産の落ち込みが激しい。従って原油情勢はグラットであり、オベックも価格を一九八四年(あるいは八五年)まで凍結する意向を表明し、需要喚起に努めている。

(二) 米国の石油輸入

米国の石油輸入量は一九七九年八・一百万BD（内原油一・一百万BD）から毎年減少をつづけ、八二年実績見込では五百万BD（内原油三・五百万BD）となる。原油輸入の中東依存率も八一年二四・三%、八二年一五・八%と減少している。

(三) 日本の石油輸入

日本の石油輸入量は一九七九年五・四百万BD（内原油四・八百万BD）、その後減少し八一年四・五百万BD（内原油三・九百万BD）。中東依存率も七九年七六%、八一年六九%、八二年上期六八%と低下している。

(四) 日本のエネルギー需給

日本のエネルギー需要は一九七九年四・四三億キロワット（以下KL）、八〇年四・二九億KL、八一年四・一六億KLと二年連続減少し、石油への依存度も七九年七二%、八〇年六六%、八一年六四%と大幅に減少した。

本年四月に政府の発表した長期エネルギー需給見通しでは、経済成長率五%とし一九九〇年五・九億KLで石油への依存度は四九%に低下するものとされているが、経済成長率を三%程度に想定すると九〇年で約四・九億KLと一億KL下回る。

特に電力需要は、年率五・六%の伸びを示してきたが一九八〇年には対前年比マイナス一・七%、八一年には〇・五%の微増と、今後需要の伸びの鈍化が予想

される。電力業界は、代替エネルギー導入のチャンピオンとして、原子力・LNG・石炭の導入に積極的にとり組んできたが、今後は経済性を重視したエネルギー・ミックスを実現しなければならず、設備設計画の繰り延べと共に、コスト面から原子力の中心的役割が明確になってきた。

今回の会議の問題

点

(一) 石油

最近の石油情勢からみて、少なくとも一九八五年までは量・価格共に問題はなないように思われる。しかしながら、日本にとって石油は、中長期的に一次エネルギー消費量の五〇%を占めるものであり、この日米エネルギー関係の基本である「世界の二大石油輸入国としての利害の一致」を深める準備を進めるべきと思う。即ち、アラスカ原油の対日輸出も、将来民間ベークの取引が可能のように、引き続き研究すべき課題であろう。

(二) 石炭

米国側からは、購入及び開発投資が要請されよう。日本側は、日本のエネルギー需要の鈍化を説明し、輸入量は急増しないが米国炭が国際競争力をもつなら、民間ベースでの公平な取引が進展する点を強調することとなる。

(三) 原子力

前回提言が基本的に生きている。今回

も日本の核燃料サイクル確立政策のもつ重要性について、理解と協力を求めることになる。

米国側からは、高速増殖炉開発への協力と、米国製原子力機器の購入等が要請されよう。

(四) R & D 計画

現在、石油需給は緩和し、石油価格の上昇も鈍化している。また日米双方共に財政赤字から、代替エネルギー開発へのインセンティブは縮小している。この中で、中長期的視点をからめ代替エネルギー開発は選別の時代に入っており、日米協力のあり方が率直に話し合われよう。

おわりに

以上、今回の会議の問題点を述べてきたが、日米エネルギー関係には、国対国の問題と民間対民間の問題が入りまじっている。日本側から米国への要望は、原子力政策・石油輸出政策・R & D 政策等から、米国政府への要望が多い。一方、米国側からの要望は、一般炭購入・原子力機器の購入等日本の民間が対応しなければならぬ問題が多い。こういう背景の中での民間会議は、双方の立場を率直に話し合い、理解を深めることが大事であり、本会議が、今後共、日米間の太いパイプとなるよう成功を祈っている次第です。

未利用地の実態と利用方策

土地問題は、国土の狭い我が国にあっては特に重大な社会問題のひとつである。地価の高騰がこれまで日本の経済にどれだけ大きな影響を与えてきたかは今さら述べるまでもないだろう。

最近、土地の価格動向は沈静化しつつあるというが、国民にとってはまだまだ容易には手に入れることのできない資産価値を持っており、依然として宅地不足と言われる一方で、在庫処分に困るマンションパニックがあるという、深刻な住宅不況の波に襲われている。

土地問題は、従来の「宅地供給」「地価」といった限定された観点から、より広範な「住宅」「防災」「快適な居住環境」「都市農業との共存共栄のあり方」などの幅広い角度からのアプローチが求められている政策テーマである。

昨年、三大都市圏の市街化区域内農地の宅地並課税の完全実施をめぐる様々な議論が繰り広げられていたが、当研究所でも土地問題に関する自主研究会を主催し、経済評論家の飯田久一郎氏、大石泰彦東大教授や、東京都農業協同組合中央会会長、東京都の住宅局長、日本経営者団体連盟、政策推進労組会議

の事務局長など、各界の有識者にひとつの同じテーブルを囲んでもらい、活発で率直な議論を行なって頂き、その結果を「土地問題解決のための具体的な政策提言」としてとりまとめた。この提言は朝日、毎日、読売などの新聞紙上でもとりあげられた（朝日・毎日・読売・日経昭和五十六年十月三日、毎日社説五十六年十月七日、読売社説五十六年十一月七日、朝日天声人語五十七年四月二日）。

このように、当研究所では、土地問題に関する研究に対して積極的に取り組んでいる。特に国土庁からは、国土庁が発足して以来、十年近く毎年調査研究を委託されている。

これからレポートする「未利用地の実態とその利用の方策に関する検討」も、国土庁土地局土地利用調整課から三ヶ年継続して受託しているプロジェクトである。

現在、国土利用計画法の規定による遊休土地制度の対象とはならない未利用地が全国には相当量存在しているが、これら国土法対象外の未利用地についても、その活用を図るべきことが各方面から求められている。

国土利用計画法の第二八条では、遊休土地の利用促進措置を講ずる場合の第一段階の手

続きとして、「遊休土地である旨の通知」の権限を都道府県知事に与えている。現行制度では、この通知が行なわれてはじめて、遊休土地に係る計画の届出義務が生じ、その計画についての助言、勧告等の一連の措置を講ずることが可能となる。しかし遊休土地制度における認定要件の第一に面積規定がある。それは、市街化区域内の土地では二千平米以上、市街化区域を除く都市計画区域内の土地では五千平米以上、都市計画区域外の土地では一万平米以上の土地に限られる、ということである。従ってこれらの面積未満の土地については、遊休土地である旨の通知が行なわれることはあり得ない。ところが現実には、特に東京や大阪を中心とする大都市圏域や、人口が急増し市街地化が急速に拡大しつつある地方中核都市周辺部等において、二千あるいは五千平米未満の土地の利用方法が厳然たる問題として存在しているのである。

「未利用地」というイメージは、社会通念的には、荒廃した土地、雑草の生い茂った土地等、所謂「空地」と受けとめられているが、法制度上は上記手続きを要する土地は「遊休土地」であって、「未利用地」の明確なる定義は確立されていない。但し、昭和四十九年に改正された国土庁土地局長の基本通達「未利

用地の要件の認定基準と運用」の政令文によってある程度規定されたが、この通達内容は、国土法二八条一項第三号に該当するものとされ、都道府県知事の助言勧告に至るには、いずれにせよ上述した様な面積要件の規定を受けなければならぬようになっていた。また、「未利用地」の詳細は別途通達することになった。また、「通常認められる用途のいずれにも全く供されていないもの」以外については例えば「整備の水準、使用の頻度、管理の状態等が、周辺地域における同一の用途に係る土地の利用の程度からみて『著しく』劣っていると認められるもの」という程度の規定にとどめられている。

それでは、具体的に「著しく劣っている」ということをどのように評価したらいいのか、これが、私たちに与えられた研究テーマであった。

私たちは、初年度、まず「未利用地」とはの概念規定から始まって、未利用地認定基準案設定のための事前調査を実施し、ケース・スタディ地域の土地利用動向を時系列的に把握していく中から、地域特性を考慮しつつ、その地域における土地利用形態として低位なものを出した。「低利用地」の中には当然「未利用地」として認定されるものが含まれている。それらは、都市地域においては、概して建物の建っていない土地に包括され、主な形態としては「農地」「公園緑地等公共用地」「空地」「駐車場」「資材置場」として存在していた。この中から特に問題になる資材置場と駐車場

を取りあげて、次年度目に、実態分析及び未利用地認定基準案の設定作業に入ったのである。

実態分析は、サンプル（未利用地）の存在する周辺状況と当該土地の整備・管理の状態を指数的に把握することであった。周辺状況としては、用途地域や容積率、人口の伸び率、区画整理事業や道路計画事業の進捗、最寄駅からの距離等を取りあげた。また、駐車場整備状態として、地面や側面施設、開閉扉や管理人の有無、連絡先や料金を表示する表示板の有無など、また当該地の条件として、面積、形状、接道間口、前面道路幅等、さらに地目、所有者、取得原因等の登記上の権利などを調査し、サンプル約四百件を一次集計し、数量化三類とスコアランク集計によって解析した。何故数量化解析を行なったか、数量化の妥当性、その目的や具体的な手法については本報告書の三章に解説してある。

以上のような分析結果を踏まえて、サンプルを類型化し、類型ごとに平均的な整備水準の検討を行ない、平均的整備水準に著しく劣る最低整備水準を把握することにより、未利用地認定基準案を設定しようとした。即ち、駐車場をケースとして取りあげた場合、駐車場の整備水準と周辺条件の相関関係に着目し、数量化三類によって求めたスコアを用いて、個別駐車場の指数的に評価し、周辺条件の違いにより、駐車場の平均的水準がどのように分布しているかを分析した上で、平均的水準に著しく劣る駐車場はどの程度の整備水準なのか、周辺条件のパターンごとに評価したのである。この最低整備水準に満たないものは、

駐車場という名目で「利用」されていても、「未利用地」として認定せざるを得ないということになる。未利用地の対象となる最低整備水準を数値的に明らかにしたのが本調査研究報告の成果である。

この成果は、前述した国土法第二八条一項第三号要件の通達内容に該当するもので、未利用地の利用促進を考えるにあたっては、より広い視野から判断すべきである。

土地利用は本来「土地利用形態を明確化」していくことを前提にしないと合理的且つ効率的な土地利用を計画的に運営していくことは難しい。従って例えば、駐車場の場合でも、駐車場というからには、最低限の整備水準を一定限度まで引き上げ、「駐車場としての利用形態を明確化」しなければ、それ以外は未利用地とみなされても仕方がないだろう。未利用地認定基準案は、周辺の環境や様々な条件によって決して一律のものではないが、未利用地と認定して利用促進を進めていく上には、さらに周辺の住民の意向等をも考慮し、新たな土地利用形態への転換を要請しうるだけの地域的な計画的視点を持ってこそはじめて行ないうるものであることを忘れてはならない。尚、本年度は未利用地の利用促進方策についてゲーミング・ジュミレーション手法を用いて調査を実施中である。

(相羽真知子)

●技術情報貿易でも黒字に近づく技術大国日本

技術貿易—欧米の先駆的な業績をとり入れて、早速、最高級の製品をつくりあげるのが日本のお家芸。科学技術庁の発表による「海外からの技術導入契約」報告も、この事実を裏付けている。五十六年に日本が外国からの技術導入に支払った金額は十七億一千百万ドル、技術輸出に対する受取額は五億三千七百万ドル。十億ドルを越す赤字で、収支比率は〇・三二。アメリカの八・〇三、フランスの一・四二、イギリスの一・一九に比べると誠に情ない数字だ。ただ、これは過去の技術導入のツケがたまっているためで、一年ごとの新規契約でみる限り、四十七年度には逆転している。五十五年度は、導入二百七十七億円に対し輸出七百四十二億円と大幅な黒字に転じており、技術立国が単なるカケ声にとどまらず、着実に実績をあげている事実を示している。開銀の最近の調査でも、ひところ停滞を続けていた「新しい技術知識の獲得量」は上向きはじめ、技術導入が減少する反面、国産技術の比重がますます高まっていると指摘している。大企業の研究開発費は、この五年で倍増の勢い、とのことだ。このように力をつけてきた日本の技術力に対する海外の関心は高く、技術交流への要求は強い。米商務省技術情報サービス局が、日本の技術情報の本格的収集をはじめ、協力を求めてきたのもその一例。創造性ゼロと自ら認め、他国にせしられようとも、二十一世紀の日本が技術大国の二員となるのは間違いないようだ。

●高度技術の活況で再脚光を浴びる冒険的企業

ベンチャー・ビジネス—高度の技術や専門知識をもつ研究者や学者が、大企業や大学をとびだして、最先端技術を開発する目的でつくるのがベンチャー・ビジネス冒険的企業。これに資金を供給して育成を図るのがベンチャー・キャピタル。個人の力量が最優先するアメリカが本場で、数多くの成功者がでていゝる。うまくいけば株を売ってもよく、大企業に会社そのものを譲つてもよい。大金を手にして再び新企業の創立に挑む。まことにあつさりしたものだ。大きいことはいいこと、奇跡は大樹の陰、出る杭は打たれる、均等社会の日本では、あまりなじまない仕組みではある。事実、昭和四十七、八年には、日本で一時、脚光をあびたものの、石油危機で鳴

●アングラ・マナーの実態解明に大蔵省が研究班

地下経済—いまひとつの経済」ともいわれるアングラ・マナー、アングラ・エゴノミ—は、先進国・中進国・途上国といわずはびこり、表の経済におとらず、手に負えないものになっている。大蔵省は、経済統計にも現われず、税務署もつかめないこの地下経済を捕らえようと、研究班をつくって実態解明にのりだした。地下経済の源泉としては、麻薬・詐欺・売春・賭博などの犯罪にからむもの、脱税によつて生みだされた金、節税・逃税による資金などがあげられる。物々交換もれつきとした地下経済だ。イギリスやアメリカなどではGHPの二〇パーセントを越す規模とみられ、日本の場合も大蔵省が認めたのがGHPの三パーセント程度で七兆円。しかし、実際には二〇パーセント、五十兆円ともいわれている。グリーン・カードをめぐる郵貯騒動、金やゼロ・クーポン債の大量買入れの動きなども、地下経済の大きな存在をかいまみせたといえる。国によつてそのありようはいろいろだ。日本の場合、税金を逃れた金が、いわゆる「裏金」として地下へ潜り、預金や有価証券に投資され、正規の資金に化けるといのが主流だ。従つて、日本の地下資金は、利子が利子を生んで自己増殖をはじめ、新しく流入する資金と合わせると膨大なものに育っていく。放つておけば、表の経済にも大きな影響を与え、攪乱の要因にもなりかねない。十年後には国家予算の倍以上にふくれあがる、との計算もある。

●TVで品定め、電話で即支払う—もうすぐ

ホームバンキング—家庭と銀行の電算機を通信回線で結び、家にながら銀行と取り引きできるホームバンキングが、アータ通信の自由化によつて、実現へ向け一歩前進した。家庭に置かれた端末機や電話を使って、自分の預金口座から相手の口座へ振り込んだり、水道・電気などの料金を支払うことができる。航空・鉄道・旅館・劇場などの予約・支払いも可能で、テレビ画面に映る商品のみならず注文し、即刻支払うという芸当も簡単だ。そのつゝ、財産管理の相談や経済・金融情報を受けとるのもたやすい、といいいことづくめだ。金融界では、第一次のコンピュータ化によつて事務合理化をすませ、第二次で銀行間を結ぶ現金自動支払い機の共同利用などを実現

●文化・情報時代の新催場都市を目指す神戸

コンベンション・シティ＝ポートピアで都市経営に優れた腕をみせた神戸市が次の目標に力かけたのがコンベンション・シティ。つまり、国際会議・集会・見本市都市。ジュネーブ、ウィーン。パリなどが有名で、新顔では、タラスガ 万五千人収容の国際会議場を持つ。アジアではマニラが五千人の規模を誇る。工業化社会の次は文化産業・情報産業の時代とあつて各国とも力を入れ、また国内にも強敵は多い。東京がマイタウン計画の環境として国際会議場の建設を打ち出せば、横浜は「みなとみらい21」計画の中核として、大阪は二十一世紀ビジョンの中心にすえて對抗の構え。一歩先をゆく神戸市は、ポートピアランドの中に、大小ホールを完備した神戸

国際会議場、六千平方メートルの神戸国際展示場、神戸ポートピアホテルと、計画的に関連施設をまとめているのが強味。さらに、一万人収容の体育館をお隣につくろうという力の入れようだ。会議都市としての地盤固めは着々と進んでいるといえよう。だが、問題になるのは、ハードとしての設備もさることながら、むしろソフトの面だ。進行・演出を支える事務所機構、通訳・速記者・ガイドなどの人材確保や、記録の配布、関連行事の設営などの能力も問われる。京都・大阪の力を頼みにするにしても、広く市民の協力が得られるか、市民生活を一部犠牲にしても会議に便宜が図れるか。知患者・神戸市にとつても大仕事のように。

●欠勤率、休暇消化率が如実に示す働き蜂の精勤

欠勤率＝日本人はやっぱり働きバチ、という事実が、労働省の昨年の「労働時間制度調査」で裏付けられた。その証明の一つが低い欠勤率。所定労働日数一七四・三日に對し一人平均四・五日の欠勤で、一・六パーセントにすぎない。イタリアは一〇・六、フランスは八・三、西ドイツは七・七、アメリカは五・五パーセントだから、かはり低い水準だ。その中味も大企業だと〇・八、中企業は一・八、小企業が二・五パーセントだから、大企業ほどモーレツ社員が多いことになる。病欠を欠勤扱いにしないなどの例外もあるため、顔面通りではないかもしれないが、サラリーマンのまじめぶりが、国際水準を抜いていることが確かだ。このほか、年次有給休暇は十五日

だが、実際に休んだのは八・三日で消化率は僅か五五パーセント。前年の六一パーセントより後退したのは、不況のためと週休二日制の普及によつて年休をとる意欲が減つたからと考えられている。ところで週休一日制だが、普及率は採用企業数でみて四八パーセント、対象労働者からみると七四・七パーセントに達している。しかし、月一回週休一日が二・三パーセント、月一回が四・八、隔週七・九、月二回が二・二で、完全週休二日制は五・七パーセントにすぎない。勤勉ぶりが証明された日本人だが、問題はなお残る。一人当たりの生産性ではまずまずとしても、時間当たりとなるとまだ低い。上手に、余裕をもつて働くというのが次の目標になりそうだ。

●どっこそこ及び腰でもあるカタカナ社名大流行

カタカナ社名＝ソニーの成功にあやかろうといつわけてでもあるのだろうか、社名を現代風に、つまり多くはカタカナに変える企業がふえている。機械の津上ツガミ、日綿美業がニチメン、揖斐川電気工業はイビデン、エアコンの三共電器がサンデン、コムの大興化学工業がブランド名のアキレス、富士通フアナツフは親会社離れてフアナツフに、東北肥料はコープケミカル、宅急便の大和運輸がヤマト運輸といった具合だ。業容が拡大し本体をあらわさなくなった、合併や分離独立、通称を本名に、ブランド名と社名を合わせるなど理由はさまざまだが、カタカナにするか、短縮するところが多い。商業登記や印鑑のとりにかえ、封筒・名刺の刷り直し、看板・標示

のつくりかえなど、大企業では一億円前後の費用がかかるといふ。それでも新たな出発として飛躍できれば安いものかもしれない。全社的な経営戦略や理念を統一して企業イメージを意図的につくりだすコーポレート・アイデンティティーの手法にもすべなじむ。社名・社章・商標を一新し、商品・制服・工場・事務所に至るまでデザイン・色彩管理を徹底し、社員の意識改革にまですすむというアメリカ仕組みの活性化戦略を生かせる、というものだ。創業者名や発祥の地名が消えていくのも時代の流れだが、文字ツラと発音のよさからつくりだされた「コタツク」ほどの大胆さはなく、旧社名の影をひきずつての衣替えであるところはなんともつましい。

●動物的なカンで破局に気付いた？……森林作り

ふるさとの森＝自然植生は二割弱しか残つておらず、自然海岸は五〇パーセントをきり、東京では高度成長期以後二十、河川と十五の堀・池が姿を消したという（日本の自然破壊地図）。このままでは日本の自然は壊滅する、との危機感から、ナショナル・トラストや緑の地球防衛基金をはじめとして、自然を守る、少なくとも計画だけは田中伸一の盛況だ。二〇〇〇年の南関東のあるべき姿を提案した建設省の整備計画では「ふるさとの森」の新設が目玉の一つになっている。大都市以外にふるさとを持たない人がふえている現実から、定住の場にふさわしい憩いの場、精神的なよりどころとなる緑の空間をつくらうとするもの。既成市街地を取り囲むように、三

浦半島から多摩丘陵、三富地区（埼玉）、荒川河川敷、中川流域、江戸川堤防、下総丘陵の南まで、長さ二〇〇キロ、幅一〇キロを広域緑地帯にする、規模雄大なものだ。一方、六年前の大火の教訓を生かそうと、山形県酒田市は「ふるさとの森づくり都市」の推進をうたっている。火伏せの木「タブ」が延焼をくいとめた実績から、タブ、シイ、カシなどの照葉樹を育てて、全市をあげてふるさとの森を根づかせようという張り切っている。壊してから直すよりも、はじめから壊さなければ――と嘆きたくなるほど人間とはバカな生き物らしいが、ここに来ての自然の見直し機運、破局近しいに気づいた動物的なカンのおかげで遅きに失していないこと祈りたいものだ。

用語でみる「いき」

●日本の誇り「旨い水道水」復活へのうづき

うまい水！外国船は「コーベ・ウォーター」を構むことを喜んだ。ヨーロッパに洋行した日本人は、そこではミネラル・ウォーターを飲まなければならないことに驚いた。熱帯の植民地では生水を飲むことを、かたきましまられた。それに比べ、日本の水はなんとつまくて安全なものか、というのが、少なくとも戦前の日本人のささやかな誇りだった。ところが、現在では、水道の水のまささが嘆きのタネになってしまった。給水人口約一億七百万人、普及率九一・五パーセントの文明国になったあけく、「カレ臭い、ヘンな味がする、赤っぽい水」との苦情が絶えない。極端なところでは、発ガン物質トリハロメタンの濃度が基準を超す水道が全国で五カ所もみつかったという始末だ。湖や貯水池など閉鎖水系に類する水道がふえ、汚濁がすすみ、藻類が異常に繁殖し、環境汚染がはなはだしく、多量の消毒薬が投じられる、などのせいにされている。また、明治生まれの古い水道管、戦後すぐ埋設された粗末な配水管に寿命がきているのも原因の一つといえそう。厚生省はこのほど、二十一世紀へ向けての水道行政のあり方を諮問した。その中心になるのが「おいしい水づくり」で、水中に含まれる物質の、味と安全面での基準を定めることを目標にしている。ミネラル・ウォーターが、にわかに入気を呼び、全国で三十銘柄もあるピン詰め、パツ詰めの水が引く手あまたというごたごた。これに負けないうまい水の復活を願いたい。

●消え去らなかつた老兵——米の四巨艦現役復帰

「ミサイル戦艦」「大和」は、徳之島西方一〇カイリの海底から浮かび上って手宙戦艦となり、大いに日本中を沸かしたが、いま、アメリカでは戦艦「ニュージャーシー」が再役のための工事を急いでいる。アイオワ級戦艦四隻は、太平洋戦争の中期以降に就役、すでに主力艦の座は空田にとつてかわられていたものの、強力な四〇センチ砲、防弾力、高速力にものをいわせ、機動部隊の護衛や陸上砲撃に威力をふるった。戦後も大事に保管され、一朝事ある時に備えていた。事実、朝鮮戦争、ベトナム紛争にはモスボールを払って出陣、九門の巨砲が火をふいた。ニュー・ジャーシーにとつて四度目の現役復帰は、ミサイル装備によつて、ソ連海軍力の膨張に対抗するの

●米の四巨艦現役復帰

が狙いらしい。一九八三年一月には、ニュー・ジャーシーが太平洋艦隊に配属され、アイオワ、ウイスコンシン、ミズーリもこれに続く。再就役三年後にはさらに大改装をうけ、ヘリコプター、垂直上昇機二十五機を搭載する航空戦艦に変身する、という。かつての海上の王者の、最後を飾つた四巨艦に、思わぬ花道が用意されたわけだ。強いアメリカの再生をめざすレーガン大政の軍事戦略が生み出した鬼子ともいふべきか。第一段階の改造では、艦の容姿はほぼ往年のままで、軍艦ノアの血を騒がせることになる。石炭だき船、帆走タンカーも登場する最近の海の話題は、先端技術と省エネ・省資源が重なりあつ、風変わりなものになりそう。

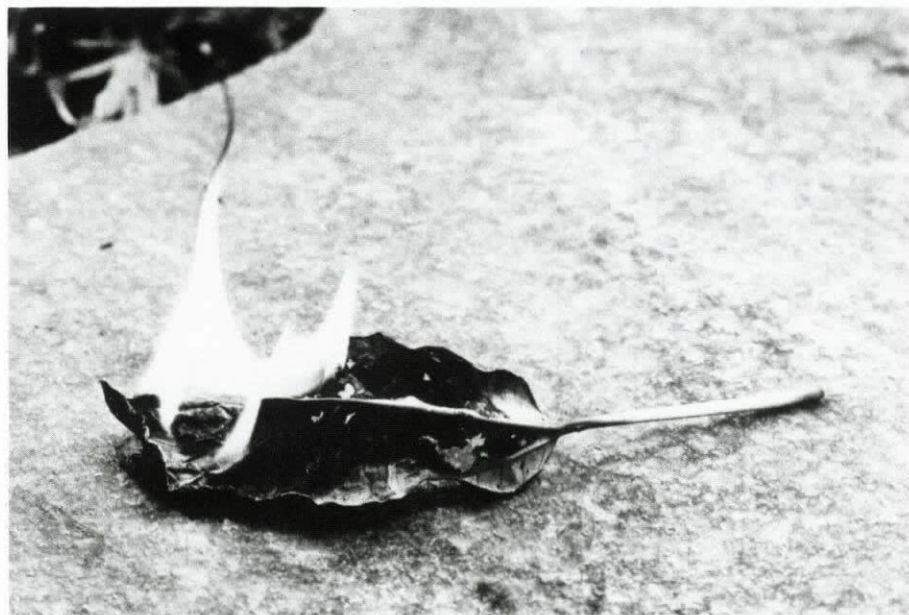
●母体死亡が七倍増の外国例もある——中絶規制

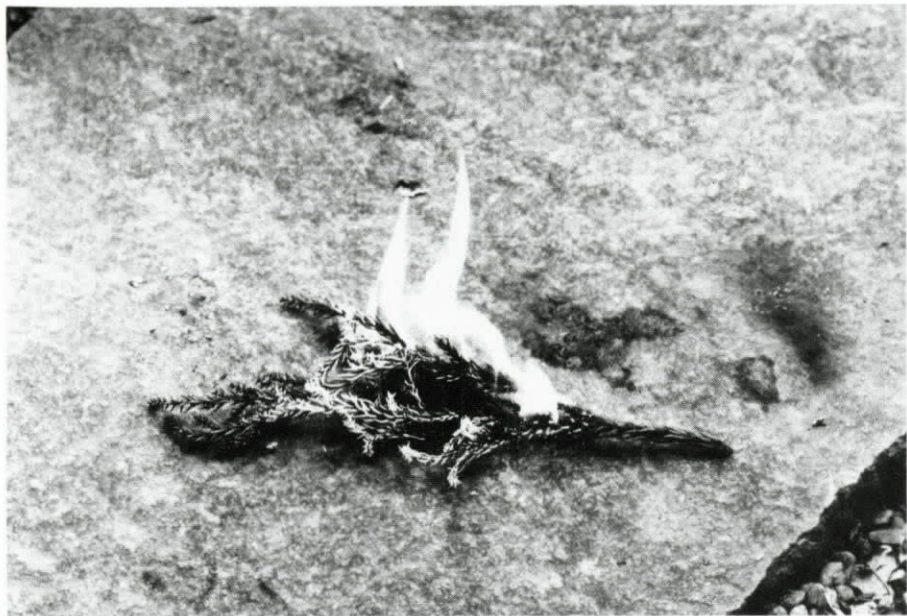
墮胎罪！刑法の中に眠っていたこの言葉が、目覚めて起きあがつてきそうな風の吹きまわしてある。年間六十万件（届け出数。実際は倍以上とみられている）近い妊娠中絶のうち、九割以上を占めている「経済的理由」を、優生保護法から削除する改正案が準備されているからだ。経済大国になった現在の日本で、いまさら経済的理由でもあるまい、というのが提案の趣旨で、生命の尊重を表向きうたつている。また、十代の中絶が三万件を超す現実に、歯止めをかけるのも狙いの一つらしい。早速、女性連動家、産婦人科医たちが、「法律で禁止するとヤミ中絶が増え、母体の危険が増す」「産む産まないは女性自身で決める」ことだ。「戦争中の産めよ増やせよ式の出産管理」が提議の趣旨で、生命の尊重を表向きうたつている。また、十代の中絶が三万件を超す現実に、歯止めをかけるのも狙いの一つらしい。早速、女性連動家、産婦人科医たちが、「法律で禁止するとヤミ中絶が増え、母体の危険が増す」「産む産まないは女性自身で決める」ことだ。「戦争中の産めよ増やせよ式の出産管

●若い女性の拒食症に對抗？ 中年男性の過食症

拒食症！「ボチャツとしてかわいいネ。」この一言で、自分は太りすぎだと悩めます。やせたい一心で食欲がなくなる。ひどくなると、食べたものを無理に吐いたり、下剤を常用して、カラの消化器をさらにカラにしよつとす。ある程度やせたところで止めればいいが、ついにカリカリになって、栄養失調から死んでしまつても。体重三〇キロをきるのにはまず間違いない拒食症。ホルモンを分泌する間脳下垂体に障害をきたす病らしい。思春期の少女にこの「神経性食欲不振症」のケースがめだちはじめたのを重視して、厚生省は「中枢性摂食異常調査班」を設けた。その調査によると、昭和五十六年の患者数は全国で千三百十二人。五年前に一部の医療機関で調べた数字の二倍にもなっている。本人に病気の自覚がないのが特徴、というところからみて、潜在患者はすいぶんいそう。一方、逆に、中年サラリーマンや独身〇〇の間では「週末性過食性」とでもいう現象が増えている。平日、仕事でストレスを抱え、るくに食事もとらない人が、休日の安心感から深酒、あるいは間食をとりすぎる。オフィス街の診療所では、月曜の朝は、むかつき・下痢を訴える患者でにぎわう。拒食症にしても過食症でも、動物の生命維持に最も大切な部分で心の病気にあがされたものだ。飽食の時代に義務感での食事。脳の発達で、動物本来の機能を忘れさせている故の病理現象とすれば、恐ろしいことだ。

〈福井正也〉





特集

たき火



たき火の こころ

米山俊直

京都大学教養学部教授 = 加藤秀俊後部会

神崎宣武

近畿日本ツーリスト(株)日本観光文化研究所事務局長 = 加藤秀俊後部会

●特集対談●

華やかさを演出する神事のたき火

米山 私は奈良の田舎に育ったんですが、一種の幼児体験がある。正月になると除夜の鐘を聞いてから雑煮を祝い、それから必ず子供の足で十五分ぐらいの距離を歩いてお宮に詣でるのです。すると境内の真中にすごく大きなたき火があるんです。村の人も集まってくるんだが、別に挨拶もせずにお参りして、火をしばらく眺めて帰っていく。ああいうのは何というんですか。

神崎 サイトウでしょうか。正月十四日、あるいは十五日のトンドに準じる火祭り行事をサイトウヤキとかサイトウバライというところがありますね。潔斎清浄の火をサイトウといつてよいのでしょうか。ひとつには年越の寒い時期ですから暖をとるためですが、やっぱり神事になると、特に夜ですと、何らかのあたりで大きな火が必要になるんでしょうね。火の材料は何だったのでしょうか。

米山 大きな松の根っこみたいなものが燃えていた記憶がありますね。

神崎 東日本はよく知りませんが、中国地方から九州にかけての夜の神事に関した大きなたき火は、松をたく場合が多いように思います。サイトウは神が降臨するための清浄の火ですから、松という清浄の木をたくという

こともありますが、機能的に考えてみても、松は煙が非常に少なくて炎が長く伸びますから、広い範囲をきれいに照らすし、集まった人たちも煙むたがらずに火にあたることできます。松はサイトウに非常に適した特殊な材料だと思います。また、火がまるやかで長く走り、不燃焼物が少ないために、やきものを焼くにも大切なものです。

米山 大体、たいまつが材料が松ですね。

神崎 迎え火も確か赤松だと思いますが……。

米山 檜や杉の枝も使うけど、主力は松かもしれないですね。大文字の送り火も非常にスケールの大きなたき火でしょうが、あれもやっぱり松だ。

神崎 演出面から見ると、むしろ杉とか檜の枝木のほうが、パチパチと火の粉が花火のように散って綺麗なんですけどね。僕の田舎の岡山県の備中神楽は夜神楽が中心でして、そのときのサイトウはおもに松丸太をたいて、ときどき杉や檜の枝木をかぶせる。すると、すばらしく火の粉がはじけて、サイトウ自体がイベントみたいな華やかさが生まれてね。

米山 伏見のお火たきは、火たき串という檜で作った割り箸の親玉みたいなものに名前

たき火で目覚める原初人類の記憶

と願いごとを書き入れて何十万本と燃やすんです。檜の青い葉で囲った大きなやぐらを三つ組んで、その中で三時間ぐらいすごい勢いでたき。面白いですよ。

神崎 檜の炎は松と比べてどうですか。

米山 火の木と言うぐらいでして良く燃えますね。

神崎 すると、松よりは檜のほうが本当は神や仏の火にいいのかな。

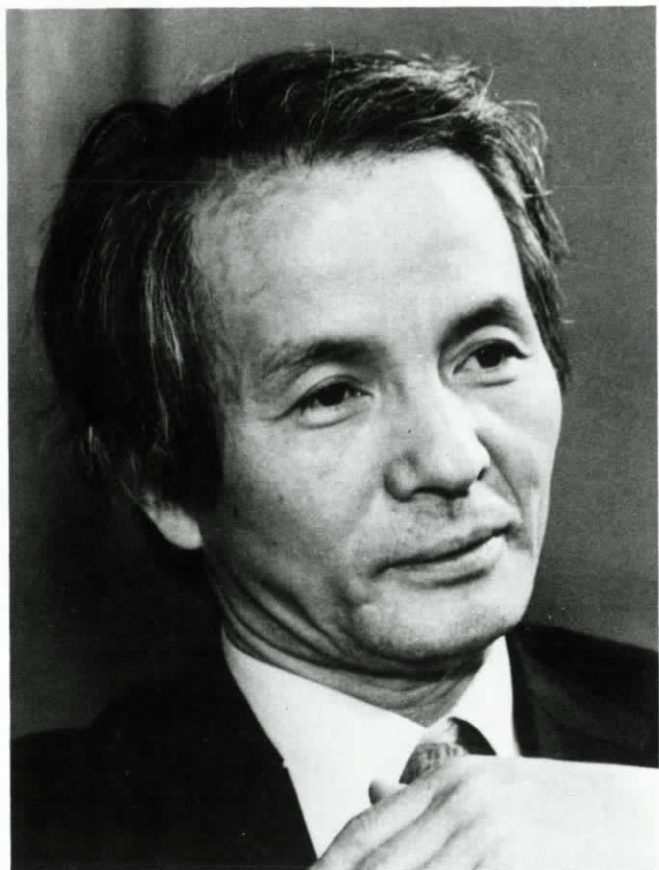
米山 鞍馬の火祭り、熊野の那智の火祭り

など、何度か見ましたが、やっぱり火というのは、なにか非常になつかしいような連想を呼び起こす。話が飛躍しますが、これは本

当に太古の、人間が火を見つけて使い始めてからの記憶の蓄積みたいなものがあるって、一種の原初体験として続いている……。

神崎 人類の原点に戻るわけですか。やはり、動物と人間の境は火が一つの大きな要素ですからね。

米山 人間は雑食性の動物といわれていて、歯の構造も草食に適した臼歯と、肉食に適した犬歯と半々ぐらいですね。この雑食のためはかなり大きな要素として、火でやわらかく



米山俊直

して食べるということがある。チャールズ・

ラムの焼き豚の起源説じゃないけれど、要するに自然に焼けたのを発見して食べてみたらうまくいったことから、火食の習慣が身についたんでしょが、火食の習慣がついたために、歯の形がだんだん変わってきたとみることもできる。どうも、人間が人間となった最初は、まず火食であり、言葉なんかははるかに後から出来たという説がありまして、最近では僕もそれに加担しているんです。言葉なんかつかいこのあいだまではしゃべらなかつた。キヤールとか、ギャールとかの叫び声のほかは無かつたというわけ……。それだけに、たき火の燃えているのを見ると、かなり古い記憶が戻ってくる。フロイドやユングじゃないが、非常に古い人間としての記憶みたいなものが残っているね。蛇を見て恐いというのと似たような話ですが。

神崎 その原初的なことに触れるかもしれませんが、火の憑依という問題も考えられはしないでしょうか。たとえば、古いやきものづくりですが、僕は何年前に素焼き土器に興味を持ちましたね。アフリカ、南米は行ってませんが、粒食文化圏というか東南アジアあたりを歩いてみたのです。そこでの古い生活形態は、鉄が無い場合が多く、穀物を土器で炊くあるいは、蒸す。その素焼きの土器の

成型は女性がやるが、焼くときには男性が立

合う場合が非常に多いですね。ま、それはその社会での男女の労働分担などから分析すべきなのでしょうが、うがった考え方をすると火の憑依、特に女性の精神や、生理のバランスが崩れているときに、そうした大きなたき火に長時間さらすと、精神的なバイオリズムが狂って周囲への影響がよろしくない、という見方もできる。それで徐々に女性がそうした火から遠ざかったのだと……。また、職人が登場しますと、女性を排除するタブーがでてくるように思えますが、やきもの場合は、成型の細工場へは女性も自由に入ります。来ますが、窯へは絶対触れてはいけないわけです。現在では女流陶芸家も多く、ほとんどの窯場でそのタブーが崩れています。でも、古い窯元では、女性が窯に近づくのを極端に嫌います。特に、火が入ったときには絶対タブーですね。窯で火をたくと、作品が目前で完成するという興奮状態もあるが、ベテランの窯たきでさえ失禁したりするほどの異常な精神状態になる。長時間の大きな火というのは、なにか人間を錯乱させるものがあるように思えますね。

米山 それを逆用しているのが護摩や神事の火ですね。わざと大きな火をたいて精神的な興奮を呼び起こす。普通のたき火でも、そ



神崎宣武

くるらしい。犬や猫は離れるんですよ。火をたく理由の一つにけもの除けがありますが、サルが比較的寄つてくるとなると、動物と人間の中間にサルを置いて、火の話題をその辺から拾ってこれないものですかね。

米山 火は恐いものに違いないけれども、それを使えるようになって人間が人間になつたんでしょうから、かなり早くから人間はたき火をやっていることになる。しかし、燃えている炎を見ているのは、気が変にならない

狩猟採集民とたき火との強い関係

米山 古いたき火の使用例という化石人は実際に見られないから仕方ありませんが、現存する狩猟採集民の民族誌はあるわけです。いまは絶滅していても百年くらい前までは生きていた人たちもいるわけだ。有名な例では南米最先端のマゼラン海峡のフエゴ島の話がある。ティエラ・デル・フエゴ火の島です。なぜかというマゼランが通つたときに、海峡の両岸に点々とおびただしい火がついてたからだというんですね。ビッグル号でダーウィンが行つた時にも同じ様子だった。多島海の入江の中に住んで貝や小魚、カニなどを採って暮しているヤーガンという採集民の連中が火をたいているんですが、何故有名になつたかという、皆、素っ裸で暮している。

までもいいものですね。炎自体の変化もありますが、ものが灰になるという燃焼の変化もあつて面白いもんだと思います。
神崎 視界が開けている場合は、それほど作用はないでしょうが、先のやきものを焼く場合など、目が離せませんから見続けざるを得ない。じつとあの赤い炎を見ていると、自己催眠にかかつてしまう気がしますね。そのあたり放火といった問題や、もつとサルに近い状態まで関わるのかもしれない。

なんたつて外海は南氷洋ですから猛烈に寒い。こんな寒いところによく裸で適応しているというのでダーウィン時代の民族学者なんかにも関心を呼んだ。その当時の言い方という、野蛮人の最たるものです。それがたき火をやっていたんですが、もう、ほとんど絶滅したようですね。

神崎 火で暖をとっていたのですね。

米山 明かり取りと暖の二つが主な理由ですね。それと面白いのは、これは狩猟民の多くに見られる例なんです、舟を持ってまして、その管理は全部女の人の役割なんですよ。一夫一婦の核家族で奥さんが全部面倒をみる。ダンナは一緒に行つて貝取りをするんだが泳げなくて海に落ちるとおぼれて死んで

燃える炎の美しさに魅いられる

うしたものを求めているところがあるんじゃないかな。また、土器を作る場合ですが、フリカですと老婆が一人で丘の上に木を積み上げ自分で成型したものをゴロゴロ置いて、一日中ボンボン燃やして作っていましたよ。話を聞いた限りでは、タブーもそんなに出て

きません。ただし、そのお婆あさんそのものが、スワヒリ語でフンデイ、つまり職人、技術者という意味なんです、農耕民じゃないということ、特別な存在であつたことは確かです。

神崎 すべてのがそうだとは言えないでしょうが、人間の中には火、とくにたき火を見て異常な興奮に陥る人たちが何割かいることは事実でしょうね。放火などは犯罪ではあるんですが、その深層心理には何かその辺とつながるものがあるんじゃないですか、確かめて

みたいですね。話は違いますが、今あちこちでサルの餌づけが盛んですよね。その場合、どうもサルはたき火に寄つてくるのがいるらしい。

米山 寒いからじゃないんですか、
神崎 かも知れませんが、とにかく寄つて

しまう。また、愉快的ことに舟の中でたき火して暖をとるんです。ニューヨークの自然史博物館にかなり大きな丸木舟とスチールが入ってからの枠のついたのと両方、実物が展示されていますが、舟の真ん中に火床を作りまして火をたいている。もちろん、家の中でもたいてますがね。そうした記録が残っています。現存しているのは例のブッシュマン——いまはコイサンといましてコイがホット

ヒマラヤ山中での豪快なたき火

神崎 以前、ヒマラヤヘチベットンの村を捜しに出かけたことがあります。奥地へ行って地図も情報も無くなりますと、一番若い僕が先発の偵察隊で行かされる。シェルパと二人で行くんですから、テントも持たずに非常食糧だけ背負っていく。恵まれたキャンプなど出来ませんから、ヒマラヤ越えの旅人が露営しているような場所を見付けながらいくんです。僕は露営地の第一条件は水だと思っ

たんですが違うんですね。水はえらく下まで降りて汲んでくる。要するに、枯れた大木が何本か転がっている場所が露営地になるんです。当時は石油ライターが非常に交換率の高い物資でして、ニワトリ一羽もらえるほどながら、そろそろ普及し始めたころでしたが、ピュア・チベタンや混血チベタンの連中

が常に火繩をくゆらせて持ってまして、露営地の丸太のまま倒れている枯木に、直かに火を付けちゃう。それで調理の火はもちろんですが、夜の暖をとるんです。それでなければ寒くて寝られない。チベット人の連中は着物を脱いで裸で寝ます。毛布をつぎ合わせたような着物ですから、それを上掛けにして、下に一枚毛布を敷く。そして丸太が燃えておきになった近くへ皆が集まって寝る。慣れればいいんでしょうが、火に当たっている側はむしろ暑いくらいなのに、当たっていない方はガチガチに冷える。しょっちゅう寝返りを打つてなければならなかった（笑い）。

人を交わりやすくする囲炉裏ばた

次の一団が来て、その焼け残りに火をつける。あれは大変に豪快なたき火ですよ。もし、上空から見ることができると、素晴らしいんじゃないかな。その火をたどるとヒマラヤ越えの道が地図におとせるんじゃないかな、と思います。

米山 たき火はコミュニケーションの手段としても使われますね。インディアン

の狼煙台は有名ですが、瀬戸内にも狼煙台があつて火をたいて通信する。

神崎 狼煙の材料は何だったのでしょうか。松じゃ煙りがよく上がらないだろうし……。

米山 囲炉裏というのは屋内のたき火で、ちよつとロマンチックな感じですが、本当にあれで生活していたら大変ですね。まさにたき火で、煙むいし、まっ黒になるし、すすけるし、結膜炎は多くなるし。ひよつとしたら気管支なんかにも悪いんじゃないかな。そういう面では、必ずしも昔がよかつたとは言えない気もする。

神崎 火とコミュニケーションという問題になると、戸外でのたき火もともかくとして、家の中に入ってくると囲炉裏になりますね。囲炉裏の火をチロチロ見ながらしゃべる話と、この対談のような火をはさまないでしゃべっているのでは、話題や話の展開が少し違ってくるような気がするんですがね。

神崎 火とコミュニケーションという問題になると、戸外でのたき火もともかくとして、家の中に入ってくると囲炉裏になりますね。囲炉裏の火をチロチロ見ながらしゃべる話と、この対談のような火をはさまないでしゃべっているのでは、話題や話の展開が少し違ってくるような気がするんですがね。

米山 そうだと思いますよ。
神崎 囲炉裏が無いと、昔ばなしの伝承なんか出来にくいんじゃないでしょうか。
米山 炉端というのは、そうした意味があるのかも知れませんがね。

神崎 宮本常一先生が言っていました、昔は囲炉裏端でそのままゴロ寝が出来たから泊りやすかつたし、旅人を泊めやすかつたそうですね。上に掛けるものを一つ出せば、さっきのヒマラヤサイドの旅と似て、火の囲りの露営に近い状態ですから、非常に人が交わりやすかつたというのはあつたでしょうね。

神崎 こう座椅子にもたれて声高にしゃべるのと、背中を丸めて火を見ながらボソボソ

米山 僕も一の関と栗駒との境界の永洞という小さな村で、大きな家に泊めてもらった

ことがあります。大きな囲炉裏があつて、周りを囲つて十二人ぐらいが放射状になつて寝る。僕らが行つた時は、一方に掘ごたつもあつて、そちらへどうぞと言われた。掘りごたつの方が進歩した形ですからね。まあ、たき火というのは、採光と採暖の二つのためですね。不用物を燃やすためというのはつけたしんじゃないかな。

落葉たきもままならぬ現代都市

神崎 正月映画の『ふうてんの寅さん』では、山田洋次監督は、ほとんどいい

くらい帝釈天のお寺を描くのに、あそこで落葉をたいているシーンを出しますよね。

米山 まあ落葉は不用物といえは不用物になるかもしれないが……。

神崎 落葉たきというのは、また特別に身近な原初体験として、かなりの人びとの中に印象が残っているんじゃないでしょうか。焼き芋と結びついたりもするし……。それから、秋の落葉というのは、また香りが特別ですね。煙の香りというのが、サンマと同じように体の中に染みついてしまうわけだ（笑い）。

米山 カナダに六カ月あまりいたんですが、アメリカもそうですが、あそこでは危いからとたき火は禁止なんです。街路樹のある住宅街はどうするんだろうと思つたら、日を決めて一斉にたき火するとか、許可を求めないと駄目だとか……。ひよつとすると日本もそうかもしれないな。あんまり大きな火をボンボン燃やすと、消防署が怒るんじゃないでしょ

うか。

神崎 僕の郷里の備中神楽のサイトウなんかでも、最近は全部消防団を張りつけている。ちゃんと夜食をふるまつて一晩中立ち会つて

失われつつある日本の弥生的自然

神崎 これは僕の個人的な感覚であつて、みんなが感じるかどうかは判りませんが、僕は農村の整備された美しい風景にいちばんほのぼのとしたのどかさを感じるんです。その整備の一つの要因になると思いますが、農村というのは、むやみやたらとたき火が多いですね。漁村に比べてはるかに多い。畦を刈ると草を必ずくゆらせるし、もみからも焼く。いたる所に火があつて煙があるような気がする。煙がたなびく夕暮時の農村というのは、僕にとっての原風景になつていゝんです。今日も一日無事に終つたというのどかき、草やもみを焼くことによつてあたりがきれになつたところで次の朝や季節を迎えるんだといった連想が自然に湧くんです。

米山 あれは一種のリサイクルなんだな。自然の中で土から生じた有機物を焼やして灰にして無機化する。それを土に還すという習慣が、いつかどこかで出来あがつた。

もらっています。それが法的に決まっているかどうかは確かめていませんが……。焼畑はもう届けがいらすね。もつとも届けが必要になるようなものは、たき火の範囲を超えているのかもしれない。京都あたりはどうなんですか、枯葉を集めてたき火する光景はまだ見られるでしょうか。

米山 あんまり見られなくなったような気がする。みんな焼却炉へ持つていつてしまうのかな。

神崎 それが、燃料革命以降、薪や炭を使わなくなったので山がまず荒れてますね。それが、野良にも類を及ぼして、現象からいうと、たき火が少なくなっているだけ自然も荒れているんじゃないかな、と思うんです。

米山 それは大事なことだ。非常にいい指摘ですよ。たき火が少なくなっただけ松葉かきが少なくなつて、おかげで松茸が食べにくくなつたという悪循環もある（笑い）。

びいていましたけど、それがこのごろあまりみられない。

米山 日本の自然というのは、そうした意味で一見自然には見えるが、まさに人工物なんです。僕はこれを弥生的自然といつていい。縄文的ではないんです。狩猟採集民が鹿を追つたりしていた時代とは違って、全部ならされた自然、水田があり、里山の松林があり、落葉かきをし、たい肥を作り、有機物でも、また焼いて無機物でも、自然のものを自然に還すというシステムがあつたんでしょうね。そのシステムが無くなつてしまつた。現在は変形しつつあるんだと思います。変形しますが、非常に大きな変動期ですね。日本人を育んだ弥生的自然そのものが破壊されてきているわけだから……。

神崎 一昔前の秋などは、もつとたき火がありましたよね。夕暮になると必ず煙がたな

たき火

たき火

宮田 登

筑波大学助教授 加藤秀俊部会

関東地方には、富士山に対する信仰が古来より各地で伝承されてきている。以前栃木県や群馬県の各地を歩いて、こうした富士信仰を調べたことがある。以前は、北関東にあつては、少し小高い丘や坂の上に立つと、はるか彼方の一角に、富士の姿を認めることができたのだろう。それほど空気が澄み切っていたのである。富士を礼拝する地点には、かならず浅間塚や浅間神社が祀られているのは、一つの特色だった。だいたい五月三十一日から六月一日にかけて、富士浅間さんのお祭りが行なわれていた。祭りのメイン・イベントは、夕暮れどきに、浅間が祀られている山上で、あかあかと大きな松明を燃やすのである。松やたき木を円錐状に積み上げ、火を放つ。小高い丘で燃え上がる焔は、低地からはよく見えた。そして、それぞれお参りに行った者は、その火をもらって、一目散に我が家に帰り、門口にさすのがよいとされていた。そうすれば一年中災厄から免がれるのだという。

現在では新暦だから、六月一日というときだ暑くなつてはいない。しかし第二次大戦ごろまでは、この行事は、旧六月一日の頃だったから、いわゆる「炎暑の候」に入っている。真夏の時季なのである。真夏の最中に、たき火することに深い意味があつたのである。別のフォークロアでは、「六月一日の雪」

ということをつた。これも不思議の話であろう。真夏の最中に、雪が降つたという言い伝えが、これら浅間神社や塚に伴なつていたのである。一説に万年雪をいただく富士山の雪が、この地に飛来してきたというのである。群馬県下では、この日に酷寒となり、雪が降つたので、暖をとるために、たき火をしたと伝えられている。大昔はよほど寒い日本だったのでろうと考へた人もいたが、これはあくまで信仰的事実だったのである。

つまり、この時季にもう一度年を改め直そうとする潜在意識が秘められていたのではあるまいか。一年を両分する考え方は、日本の各地にしみわたつており、六月にもう一度正月を迎えようとする心意は、民俗学の成果によつても明らかなのである。

その折り返しにあつて、雪が降るといふのは、雪が正月の時季のシンボルであるとしても、白雪によつて富士浅間の聖域を浄化するところに意味があつたろう。加えてたき火をする火によつて、いつそう浄められるという気持ちがかがえる。

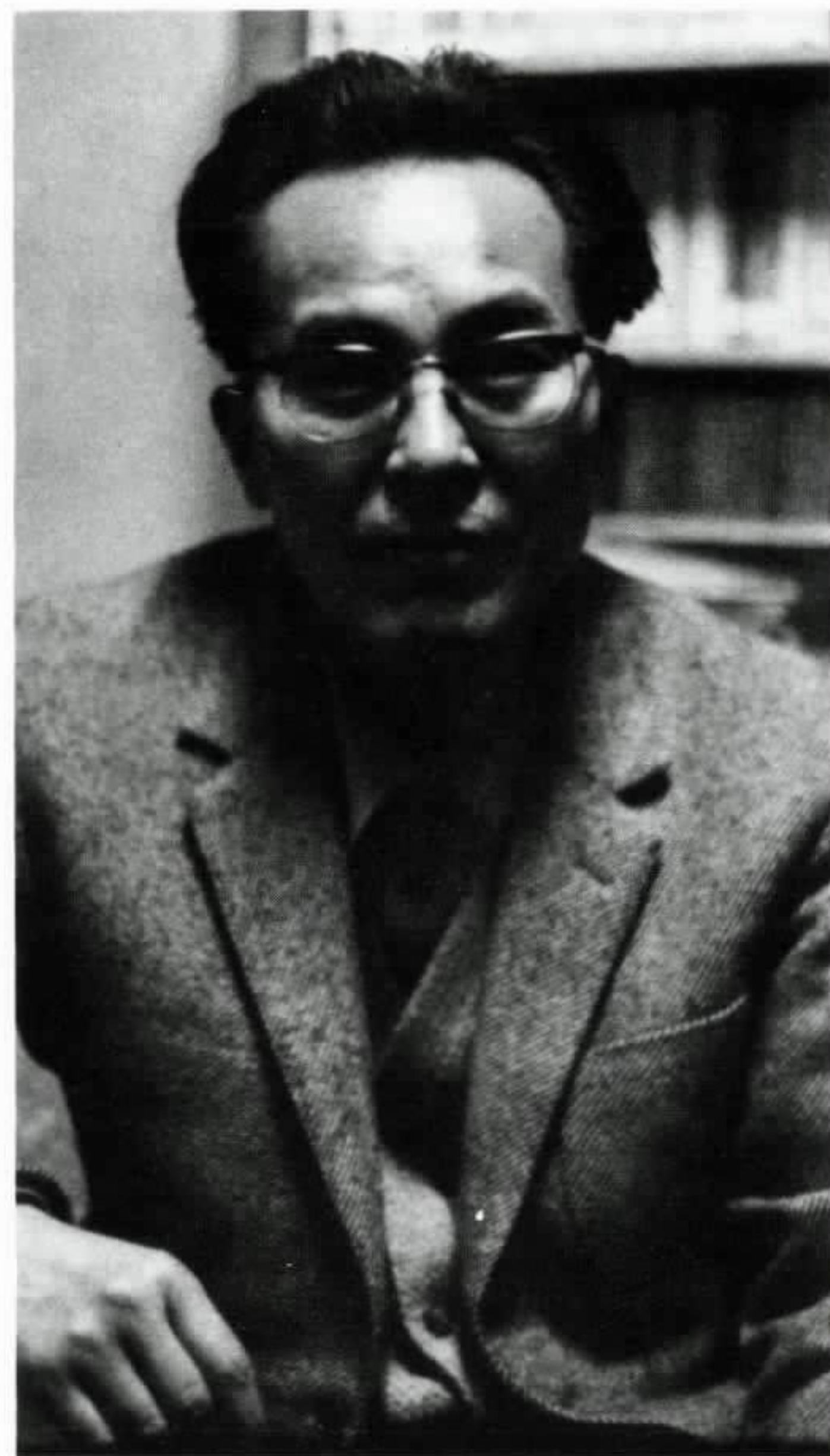
小学校の頃、信州に三年ばかり住んでいたが、正月十五日のどんどん焼きのたき火は今でも印象深いものであつた。中学生たちと一緒に、ドーロクジンバ（道禄神場）に、高さ三メートルほどのわらで作つた塔を作り、夕

方火をとます。どんどん燃え上がる火中に、正月二日に書き上げた書初めや、十四日に作つた米の団子のマユ玉を投げ入れる。書初めは、高く宙天にあがれば、学業も上々だといわれたし、この火で焼いた餅をたべると、感冒にかからないといつた。どこにでも聞かれた農村の民俗であつたが、とりわけ、燃え上がる火が、幼な心に印象深く、記憶に残つていた。

そもそも火は、浄火と考えられ、災厄を払う力をもつとされていた。焼畑農耕民には不可欠の存在であり、山村や畑作地帯には、火を中心とする儀礼はすこぶる多い。一方日本人は、水による浄化手段の禊ぎを古来より持つており、これは水田稲作の発達に伴なつてますます浸透したといわれる。

火は、煮たきをして食物を作り出す根本であるから、日常生活にとつて必須であり、とくに食物を浄化する力を秘めているので火の神^{カミ}かまど神の信仰は強い。この浄火を、穢れた火にしたくないという考えがあつた。穢火は、火事とか悪病を流行させる性格があり、全ての災厄の根源となると古代人は信じていた。何気ないたき火の風景の中からも、ゆらゆらめく灯影に、隠れた人間の心意が映し出されているのである。

たき火の思想



神島二郎

立教大学法学部教授

バギオは美しい町。高級住宅が立ち並び、

日本でいえば軽井沢のようなものだ。この町をつくったのは日本人で、われわれが登ってきたつづら折りのがけ道―ベンゲット道の開さくも、唯一の野菜供給基地トリニダットの農園の開拓も、日本人の手になるという。

大戦の末期、この町は平野から戦禍をさけてきた人々にあふれ、そこにまた、日本のフイリピン派遣軍司令部が入ったのだから、たまったものではない。建物をはじめ食糧物資の窮乏が甚しく、これに軍の持久体制の維持がさらに拍車をかけ、市民だけでなく、部隊の窮乏もひどかった。

平和な山の町があつというまに土地と人口のバランスを失って自壊していき、まもなく砲撃による破壊があいついで加わり、美しかった町はたちまち死臭と糞尿の町に化し

ていった。

仲間の〇見習士官が着のみ着のままで私たちのところに辿りついたころ、バギオの山からも山越えに、緑の夕映えのなかを斑点のような黒煙が見られた。

サイゴンに向かう輸送船にすんでのところ、間にあわず、乗船できず待機していると、リングエン沖にはアメリカ艦隊が勢ぞろいし、そこへ日本軍の飛行機が来る、空がまっくらになるほどの弾幕が張られる。

「特攻機だ。弾幕が一時にあがるんだ。特攻機が突っ込むと、ぼつと爆柱があがる。あとはないんだ、何にもなくなるんだ」。特攻の物凄さを彼は息をはずませて私たちに語った。私たちの部隊は小学校の建物を占拠し、私たちは道一つ隔てた向かいの民家にいた。そこで彼の話を書いたのだが、裏窓から盆地の

町が一瞬のもとに収められる。

一九四五年一月半ば、一夜盆地の真中にあった劇場から火の手があがる。だれのしわざか？ 暗闇のなかに赤い炎がもえあがって、宿所の窓から見下すと、異常な衝動が胸をゆさぶる。炎の明りに顔の半面が異様にざらざらと浮き上る。U見習士官は窓にしがみついて「燃えろ、燃えろ、紅蓮の炎よ」とつぶやく。私たちの胸の底にうずくものがその言葉とともにとよんでくるようだった。

三月十五日、アメリカ軍の大空襲を受ける。私は食糧受領にいった結果を報告するためにI大尉の壕に行っていたときであった。いよいよ空襲がはじまったと思ったら、爆音、爆弾の地響き、燃えはせる音。

ザ、ザ、ザーアツと爆弾が落ちてくる音とともにドーンという爆烈音。それが間断なくつづいて、いよいよそれも絶えたかと思うと、たちまちまたしても爆音である。絨緞爆撃の波状攻撃だ。

四回目にはとうとう私の壕の前に落ちた。ドーンという地響きとともに私とI大尉が入っている側壁、といっても二人がようやく入れるほどの壕であるから、わきの土がドツと崩れて半身を埋めてしまった。入口がふさがったらしく、急に暗くなった。逃げだしたい。しかし外はあいかわらず爆撃がつづいてい。いつ真上に落ちるか分らない。一メートルにも満たない深さでは直撃をうけたら一

たまりもない。そのまま墓になってしまう。

夕ぐれになってようやく爆音が絶え、硝煙にくすぶる壕をはいでみると、私たちが駐屯していた丘をおおっていた全山の松が丸裸のはげちよろけになって丘の形も変わってしまった。焼けた宿舎のかたわらに立って眺めると、向かいの丘にそびえ立ったカセドラルの大伽藍も半崩れになって、それから左の斜面にかけて立ち並んだ家並みがいっせいに真赤に燃えさかっている。教会に上るジグザグの道にそっておびただしい難民の群が右往左往している。折から西日が真赤に照らして、これはまた、すばらしい——なんとそう見えるのだ——一幅の戦争画だ。私は我を忘れてこのじつは凄惨にして、華麗なる光景に見入ったのである。

それまでにも、空襲がなんだかあり、最初のころ、空襲で市場が焼けたとき、黒焦げの死体をはじめ私は見た。パンパンにはれあがって手足をひろげあおのけにのけぞっていた。焼けた木材の下敷きになったポロポロの兵隊の死体を見ていた男が私に「腕時計をしている」とささやいたのには驚かされた。

空襲のたびごとに町の建物が消えていき、家を失った人々は丘の上のカセドラルの周囲にあつまり、伽藍の内外に人があふれ、テントや小屋がけ、なかば市場まがいの体で、ごったがえしていた。「ここはあぶない、空襲でやられるぞ」と私がいうと、現地人は「アメ

リカ軍は教会は爆撃しないよ」と昂然と答えるのだった。そこがやられたのである。

空襲のあとの町を見にいくと、私たちがよく行ったなじみの喫茶店も映画館もすべて焼かれて硝煙の臭いが鼻をつき、ガラスの破片、道路にのたうつ電線。坂を上って日本人会の建物の前まで来たとき、あの喫茶店で知ったエリという男がバケツを二つ、棒で担ってやってくる。がっしりした肩、あさ黒い顔。「どうしてる？」と声をかけると、ニッと笑って「まだ生きている」と答える。その言葉が胸にこたえる。

リングエン湾に上陸した米軍はじわじわと迫ってくる。バギオはもうもたない。「転進」の作命によって私たちの部隊はバギオを脱出する。脱出路にあたるトリニダットの橋には昼となく夜となく間断なく迫撃砲弾が落下していた。橋はすでに落ちており、夜陰に砲撃の合い間をぬって河床をわたって脱出し、二十キロ地点から右に入って山また山の悪路をたどって山地をこえてアリタオに出て、そこからさらにカガヤン平原を北上する。昼は木かげにかくれ、もっぱら夜の行動である。

トリニダットからアリタオまでの山道では、懐中電燈を持つ者があって、暗いでこぼこ道をしのいだが、やがて電池絶え、もっぱら星明りをたよりにするよりほかはなくなる。在留日本人の女子供もバギオから脱出し、部隊と前後しながらの逃避行だ。私たちと前にな

り後になりながら行く子供がおり、聞くと、バギオ在住の真宗寺院の子で、父親は在留日本人の世話をしており、子供らと別行動をとっているという。

車をひいて部隊はパンバンに向けて夜道を北上する。士気を鼓舞するため、軍歌をうたうが、どうしても四条畷のような悲愴な歌がうたわれることになりがちで、兵隊たちのなかには、このまま北上してアパリに行くのだ、アパリには日本の船が来ているという話が誰からともなくささやかれてふくれあがっていく。そしてそれが兵隊たちの足をかろうじてはずませているのだった。

パンバンを通り、バヨンボンで左折して、ラトレイに入り、そこで私たちの部隊は再編成をした。私は他の二人の将校といっしょに前線部隊に転属を命ぜられ、再編成中の建物からまず最初に外に出された。ところが、そのために、かえって私たちは命拾いをすることになる。というのは、その直後、この建物の前に爆弾が投下され、いっきよに将校下士官が八名爆死したからである。

そのころ、バレット峠では、ここを死守することを命じられた撃兵団がマニラから北上したアメリカ軍二個師団のまさに山容を変ずるほどの猛攻に耐え、これを支えていたのである。私たちの部隊が再編成を終えてバヨンボンに引き返し、ソラノ、バガバッグ、ラムート、ナヨンを経て北上し、キアンガンに向か

うころは、バレー峠の抵抗線は突破されてカ
ガヤン平原を北上しはじめた。それを阻止す
るため、バトー橋は落とされ、もつとも悲惨
だったのは、追いつめられて日本人の女子供
が川にはまり、あるいはみずから身を投じた。
私は転属に先だって原隊の物資輸送の協力
を求められ、トラックでナヨンまで来たが、
燃料不足でそこからは人力に切り換えられた。
イブラオ橋のあたりでは、谷川を眼下に岩場
をはって進み、ようやくキアングンへの道に
たどりつく。

雨季に入るところで、キアングンに向かう山
道は暗く、夜の歩行は困難であった。兵隊た
ちは車のタイヤを輪切りにし、これを伸ばし
てその先に火をつけ、松明にした。ゴムの焼
ける鼻をつくいやな臭いには閉口するが、火
のもちがいいし、だいいち明るい。シューッ
と音を出しながらいきおいよく燃えあがる炎
が闇に弧を描いて続く。その明りで人の顔が
くつきりと浮きあがる。キアングンの近くの
二叉道で顔見知りの奥さんが女の子を抱える
ようにしてくら闇のなかに立っていた。パギ
オ日本人会会長の奥さんである。「よくご無事
で」「あの時はありがとうございました」。顔を
見合わせてしばらくは言葉もない。

たしか家に泥棒が入ってそれを捕えたとき
立ち会ったのがきつかけだった。泥棒が盗ん
だのは砂糖で、彼は捕えた泥棒をこんこんと
さとし、砂糖を与えて放してやった。その人

の奥さんだ。

「ご無事を祈ります」と別れたが、しばらく
行つて私はポケットに罐詰があつたのに気
づき、あわてて引き返したが、もうそこには
いなかった。そしてもうそれっきり、あのく
ら闇と同じく杳として知らぬが、あれからど
うしたのであろうか。

キアングンで私は原隊を離れ、比島方面軍
司令部の直衛隊の一つに赴任するのだが、ど
ういうことか今はよくおぼえていないけれど
も、一時山中で交通哨を務め、兵隊や民間人
の山中移動の取締りをした、といつても、日
中の人の移動を監視し、道路に倒れた死体の
始末をすることであつた。雨のときはかまわ
ないが、晴れた日の中は敵機に人影の動き
を見られないようにすることが必要だったか
らである。

いよいよ雨季に入ると、その必要はなくな
るが、そのかわりにひどく行動が困難になる。
ライス・テラスの道はどぶ田と同じく、ふみ
こんだが最後、足をとられて沈むばかりで動
きがとれなくなるし、道中豪雨に見舞われれ
ばそれこそ臍まで水びたしだからである。

原住民の家にとりつけられ、なんとかなる
が、そうでなければ、雨に打たれて立往生す
るよりほかはない。山中の家も田畑も、食料
はほとんど取りつくし、兵隊も女子供も多く
は草を炊いて食ひ。栄養失調になり、ぶくぶ
くと身体がむくみはじめたら最後である。そ

うでなくても、雨に打たれ、マラリアに病み、
熱にうなされ、発作におそわれて、所在に倒
れる者が絶えなかった。

私は一個小隊をあくまであずかるようになってから
は、食料の確保に全力を傾注した。もちろん、
ゲリラの討伐やアメリカ軍の進攻に対する陣
地の構築は欠かせなかったが、食料の探索に
は全力をあげた。そうした努力にもかかわらず、
食糧の調達はことに山深く入って陣地を
構築しなければならなかったときは、ほとん
ど絶望的といわざるをえないほど窮乏した。

そうした或る日、偵察の途次昼食をとつて
いると、五歳くらいの男の子と十一、二歳の
女の子に出くわす。男の子にいもをやるよ、
くらいつこうとする。あとから来た女の子が
一つひたたくって食べる。食べおわると、「お
母ちゃんはどうした」と男の子がぐずり、「お
母ちゃんはおとから来るよ」と女の子はいつ
て弟をせかせて立ち去る。

私たちは二人が来た方向に戻っていくのだ
が、子供らのことを思って、私は一人遅れて
尾根道をいくと、傍らの草地に杖を投げだし
て突っ伏している女を見つける。近づいてみ
るとかすかに息をしている。声をかけようか
と思うが、ふところにはなにもない。やむな
くそのまま立ち去ったが、気になって仕方が
ない。どうしたのであろうか。

『ルソンの山々——生き残ったフィリッピ
ン在留邦人の手記』(中嶋静恵編 一九七八

年)を見ると、どうもあの子たちらしい親子三人の悲惨な最期が記されていた。

食料がないばかりか、食事のため火を焚くこともままならぬ。私たちの上空にはたえまなくにぶい音を立てて偵察機が飛んでおり、煙が立てばかならずそこへ迫撃砲が正確にうち込まれてくる。したがって、昼間偵察機が飛んでいるあいだは火をたくこともできなかった。

食料が窮乏し塩もなくなったときには、草を食おうにも臭いをかぐだけで嘔吐をもよおし、食べることもできない。無塩の毎日はじまると脱力症状があらわれてきて、坂を上ろうにも力を入れたはずの膝からすうっと力が抜けていく。そうした一カ月を過ごしてはじめて一つまみの塩を得て貴重品のようになるのひらに載せてなめたとき、塩が甘かった。これにはおどろいた。

八月の半ばすぎ、前線の尾根を視察したとき、どうも様子がおかしいという。偵察機はあいかわらずにぶい音を立てて飛んでいるが、様子が違うのだという。一つ、思いきってやってみようというので、生木をまぜて火をたく。燃え上ったところに生木をくべると、もくと黒い煙が木の間、づたいに舞い上った。ところが、いくら待っても撃ち込んでこないのである。これはたしかに違う。といつていたところにまもなく終戦の情報が入った。えたりやおうと私たちはただちに前進して民家

のあるところまで近づき、山中のたおの空屋に入り、所在の田畑のなかを探索して食料を求める。家屋は鼠返しがついた高床式で、そのなかのいりりて火をたく。とつてきたさつまいもをゆで、輪切りにして日夜火にあぶり、さかんにかんそいもをつくった。そうしていつぱいかんそいもをつくっているところに塩をたくさん持った男が訪ねてきて、ほし

いというので、塩と交換した。これで私たちは塩のある生活に入ることができた。かんそいもだけではなく、生いもをおろしかけてそれでもあんをくるみ、それをふかして私たちはまんじゅうをつくった。しかし、いくら目先きをかえても、いもはやはりいもである。たちまちのうちに食傷した。

その家からちよつと下がった尾根に小さな高床式の棧敷があつて竹格子のなかをのぞくと、子供のような風葬にされた死体がミイラになつて横たわつていた。いままでかくれていた異相の日常が目の前にあらわれてみずみずしい興味をそえる。

家のなかでは、夜も昼も火を焚きつづけて、バチバチと燃える火を囲んで談笑する喜びがよみがえつていた。そういうところに、終戦の詔勅が伝達された。私は家の前の庭に部下を並ばせ、詔勅を読みあげ、「今度こそわれわれの手で日本を再建するんだ」と訓示した。はなはだいい気なものであつたが、老人が決定した戦争のもつともつらい局面を担わせら

れた若者のなかの一人として、怨念があつたのではないかと思われる。

ところで、広辞苑をみると、たき火というのは、①かがり火、②かまどや炉でたく火、③庭などで落葉などをたく火、となつている。しかし、普通たき火という言葉で思いつくのは、第三の庭などで落葉などをたく火のことである。

私も少年のころ、秋になると、落葉掃きがあり、掃きあつめた落葉でたき火をする。忍び寄る寒さを前にそれはまことに楽しいものであつた。灰のなかにさつまいもをいけておくと、うまい焼きいもができる。それを取り出して灰をはたいてみんで食べたいものは、ほかほかとまた格別であつた。もちろん、今日では、たき火は私たちの日常生活からや縁遠いものになつているが、寒中の仕事やスポーツで暖をとるのにも使われており、寺社や集会の行事にかがり火が欠かせないものであることは、いうまでもあるまい。しかしながら、私はそれを戦争中のそれといつも重ねてあわせながら、平和のぬくもりをしつかりと味わいかえしたいと思うのである。

夢が真に魅惑的になる時……

〈たき火〉といえば、すぐに十数年前のアフリカ滞在を思い出す。

東アフリカ・タンザニアの奥地・ンブルー。そこで二週間ほど一人ですごした。映画のためのハンティングで日本からの仲間が十人ほどいたが、みんな別の方面へロケハンに出かけ、シナリオ取材のほくだけが一人残されるかっこうになった。

原住民のンブルー族の住居の近くに、一人用のテントを張って寝起きしていたが、夜になると必ず〈たき火〉をした。〈たき火〉をしていれば、猛獣が襲ってこないといわれていたし、なにより一人で心細かったからだ。夕方になると早々に木を集めてきて火をつける。アフリカの夜は動物の咆哮でけっこう賑やかだ。もつとも今だからけっこう賑やかだなんて余裕のあるいい方ができるが、はじめの数日は、〈たき火〉のパチパチはじける音におびえたものだ。チンパンジーが近くの森でさわぐ。象の群れが移動する。豹が〈たき火〉のすぐそばまでやってくる。もちろん体を見せるほどには近づかないが、闇に眼がよく光

清水邦夫

劇作家

るから、あ、きたなとわかる。そんな時、酒をあびるほどのんだり、調子ばずれの声でふるさとの佐渡おけさなどを歌ったりした。なかばやけくそで、今から思えば歌というよりは半泣きの状態だったのではないかと思う。

やがて数日たつと、少し落着いた感じになってきた。ひとつには、夜の闇のなかで火の色は実に心づよい友であることがわかってきたからだ。ンブルー地方は夜になると温度がぐーんと冷えて、セーターを重ね着しなくてはならないほど寒い。〈たき火〉の暖かさがこちらの身心をなごませてくれたこともあるが、火の色そのものがじつと見つめていると妙に瞑想的な世界へひきざりこんでくれる。

「猛獣がなんだ、それに食われようとそれがどうした。どうせ人間は無に帰るんだ」

さらには、〈たき火〉のそばにふらりとやってくる一人の友だちができたせいもある。ンブルー族のトウモロコシ畑で働くキクユ族の男だ。彼と片言のスワヒリ語で話すと、一種の「流れ者」であることがわかった。気ままにサハリしながら、時々その土地土地で放牧の手伝いをしたりトウモロコシ畑で働いたりする。荷物といえ一本の槍だけである。話は脇道へそれるが、彼等のもつ槍はドイツ人の業者が廃物の自動車のスプリングをたいたてつくったものだ。刃などついていない。猛獣と遭遇した時、こんな槍でたたかうのかとみると、彼はいつも簡単に「逃げる」といつ

た。

この男がはじめて〈たき火〉のそばへやってきた晩、カレーライスをごちそうしたら、味を始めて夕食時に必ずやってくるようになった。好ききらいはない。シャケ缶もクジラの大和煮ももくもくと食べる。「うまいかい？」とたずねると、少し考えるようにして「うまい」と答える。その感じがいかにも思慮深げに見える。

実をいえば、この男に昼間会うとまるで様子が違うのだ。ぼくは取材でよくトウモロコシ畑へいったりしたが、働いている時の彼はやることなすことドジで、いつもンブルー族の家長たちにならされていた。トウモロコシを手でもぎとるだけの単純な仕事なのに、ンブルー族の男たちにくらべて五分の一もはかどらない。そういう時の彼はまるで愚鈍に見える。あるいは安心して見えるかのように見えたりする。

しかし夜は違う。〈たき火〉のそばでは思案的にすら思える。単に見えるだけではなく事実そうなのだ。

「日本にもおれのような者(流れ者)はいるか」

「ああ、いる」

「その人間はしあわせか」

しあわせなんて言葉に出くわして、こちらはどきまぎする。それに実に重い問いだ。簡単に答えられない。そのむねを伝え、きみは



どうかと反問する。

「わからない。しあわせな時もあるしそうでない時もある」

そして深い眼の色をする。

そのほか具体的な悩みを訴えたりする。たとえば、貧しいのと、サハリをしているせいで結婚できない等々……。こういったことを話すのも、ンブルー族の人間よりぼくに心を許してくれたせいであろう。そして、そう言った一番の要因は一緒に「たき火」にあたることにあったはずだ。

「たき火」にたいする人間のポーズはさまざまある。立ったまま火に手をかざしたりする。しゃがんだり、ものに腰かけたりする時もある。さらには「たき火」のそばにべったり腰をおろす場合もある。相手がいる場合、

しゃがんだりべったり腰をおろすのが一番心を許しあえるような気がしてならない。だいたい腰をおろすというのは油断した姿だ。

逆にいうと、べったり腰をおろしている人たちのそばにひとり立っていると、変に落ち着かない。仲間はすれ違ったような気分になる。彼等がすごく排他的に見えたりする。「たき火」のそばだと、余計そんなことを感じてしまう。「たき火」のそばで立ったまま話している、いくら長時間話しても行きずりの関係にすぎないような気がする。それがしゃがんだり座りこんだりすると、時間さえも濃密になった感じになり、もう行きずりの関係ではない。

『流れ者』の男とは、毎晩「たき火」のそばにべったり腰をおろして話した。話したというより時を過したという方が正確であって、ほとんど口をきかずに瞑想的なふんい気のかかてそれぞれの思いにひたる晩もあった。かと思えば、突如ものすごく饒舌になって、それぞれの体験や思い出を語りあう夜もあった。当然のことながら彼は学校などといったことがない。文字も書けないし読めない。知識といえば、アフリカの自然に関するただけだ。それでいて充分語り合うことがある。人間に關していくらでも語れる。例えば人間の死について語ったことがあった。彼は死ぬのがこわいという。このまま『流れ者』で死んでいくのはみじめだと思う。でもどうしてもサハ

リがしたくなる。一ヶ所にいたくない。なぜそんな気持ちになるかわからない。自分がわからない……。

正直いってアフリカの原住民とこんなふうには話しあえるとは思っていなかった。とても不思議な気がした。この不思議な時間を大切にしたいと思った。そして、こんな時間をもてたのも、「たき火」のせいに違いないと再度確認した。「たき火」が彼を変えたのかも知れないし、このぼくをも変えたのかも知れない。ぼくの身にまとわりついていた安っぽい知識の衣はみるみるうちに焦げて黒ずんでいくような思いがした。

ガストン・バシユラルは「火の精神分析」のなかで次のようにいっている。「……流れる水ほど単調でもなく、抽象的でもなく、叢みの中で毎日われわれが見張る雛鳥よりもすこやかに育ち、変つてゆきもする火とは、時間を変え、駆りたてる慾望の、全生命をその終末へ、その彼岸へつれてゆかんとする慾望の暗示なのだ。そのときだ、夢想が真に魅惑的になり、劇的となるのは」。(前田耕作・訳)

彼との「たき火」の夜は、まさに夢想がたえまなくひろがり、おのれを劇的な人間と意識したものだ。

劇的といえば、「たき火」をかこむことから演劇が発生したという説がある。もちろん「たき火」をかこむことから言葉が芽生え、物語る習慣が生れていった。そして、さらに物語

る内容をより鮮明に伝えるべく手ぶり身ぶりを加える。こうしたことが演劇へとつながっていく。倉橋健氏の言によれば、アメリカの舞台装置家ロバート・エドモンド・ジョーンズが演劇は石器時代の人々の孤独や沈黙を恐れる心のなから生れたと規定し、次のようにいっているとのことだ。

夜、〈たき火〉があかあかと燃えている。あたり一面を支配する闇と静寂。獣の遠ぼえ。人々はしつかりと身を寄せ合って、だんだん心細くなつてゆく火を囲んでいる。また獣のなき声。みんなを勇気づけるように一人の男が、きょう自分がしとめたライオンをしゃべりだす。そのうちに立ち上がって身ぶりをまじえ、はいだライオンの皮をもう一人の男にかぶらせ、そのときの模様を再現してみせる。円陣をえがいてそれを見ている人々も、ライオンのほえる声をまねして、思い思いの声をだしてうなる……。

ぼくはこの説が好きだ。それというのも、アフリカでの〈たき火〉の体験がつよく重なりあうせいだろう。恐怖から身ぶり手ぶりは次第に誇張されていく。そして誇張されていくなかで恐怖の思いがさまざまにデフォルメされ、ふしぎな何か動きはじめる。こうして、劇的想像力は深められていき、恐怖の演劇が生れていく。

同じアフリカの旅で、奇妙な漫才を見た。このことは前にも書いたことがあるが、キリ

マンジャロのふもとにあるアリュウシヤという町のことだ。ある晩、アフリカン・パーといつて原地人だけがいく酒場へ近づくと、人があふれ戸外にはみ出してグラスを手にしていた。そんな賑あいのなかで、突然何かがはじまった。道路を照らす一本の街灯。その下で二人の男が「かけ合い漫才」のようなものをはじめたのだ。プロではない。あとできくと郵便局員だそう。その二人はおたがいに名前も過去もわからない人物という設定らしい。そのくせ口泡をとぼして、相手に「お前は誰だ？ 何者だ？ 早く答えろ！」といい合う。いろいろな駄じやれが入っているようだが、残念ながらこちらにはわからない。しかし名前も過去もわからないのつべら棒の間同士が、懸命になっておたがいの正体を問いつづけていくかけ合いに、ぼくは少なからずショックをうけた。独立してまもないアフリカ、植民地時代の一切をなんとか白紙にもどそうとしているアフリカで「見た」ということもショックを大きくしたのかも知れない。街灯の下に群がる人影は爆笑につぐ爆笑だった。その高揚のつぼのなかで、ぼくはきわめて新鮮な演劇のダイナミズムを感じとつた。街灯の光りは、まさに演劇を再生する〈たき火〉の役割をしているようにも思えた。

さて、流れる彼のとの瞑想的な夜は、日本人の仲間がロケハンからもどつてくることによつてたち切られた。もちろん夜になると

〈たき火〉はする。人数がふえたので、〈たき火〉はもつと盛大に焰をあげるようになった。思い思いに椅子や木株をもち出して火をとりにかむ。ロケハンの話に熱中する。おそらくそれが排他的な空気をかもし出したのだろう。流れるはやつてこなくなった。

彼がこなくなつてから、〈たき火〉はただの〈たき火〉になつてしまった。〈たき火〉の背後の闇も淡くなつたようだ。火は人間性に火をつけた」といわれているが、なにやらぼくの内部で人間性が黒くすぶり出したような思いにもとらわれた。日本人の仲間との会話も密度を欠いたように感じた。この思いは、一時の感傷のように日本へ帰つてくるといつのまにか消えていった。だいたい思い出すにしても、近頃〈たき火〉というものにぶち当たらずに済んだせいもある。

しかし今思うに、ひとつの確信めいたものが首をもたげてくる。あのアフリカでの瞑想的な世界は二度ともどつてこないのではない。そしてあの「流れる」とのあいだにあった〈沈黙〉をもう二度と体験することができないのではないのか。

たき火

日本国語大辞典（小学館）をひいてみた。

焚火の項にはこんなことが書いてある。

①照明のためや、体を暖めるために、かまどや炉で薪を燃やすこと。また、その火。

②江戸時代正月三日の謡初めと十月上の亥の日の亥猪とに、江戸城の大手門と桜田門でたかがり火。

③庭や路上などで、落葉や木片を集め燃やすこと。また、その火。にわ火。

わたし達がいま焚火をイメージするとき、この③になるのだろうか。

冬。どんよりした寒空の日。大工さんや左官屋さんが、よく路上で焚火を囲んで暖をとっていた。チョロチョロ燃えている木片で、

キセルのさざみ煙草に火をつけたりして……。

通りがかりの人もふと足をとめ談笑する。なにやら、心が和んでくる。

幼い頃、わたし達も落葉をはき集めたり、木片や空俵を燃やして焚火をした。うす紫色の煙は立ちのぼって空にとけ、風の向きが変わると、焚火をかこむ子ども達を追いかけ、

涙の向こうで、夕暮れの星が光っていた。

わたしも、わたしの子ども達も、それぞれの思い出を焚火に持っている。でも、いまは

一つの光景として、あの火の色や煙のにおいを思い浮かべるだけで、もう焚火をすること

はない。

十年ほど前、まだ練馬に住んでいた頃、息子達と庭の掃除をし、山になった落葉で盛大に焚火をした。これは、たしかに一つの浄化作用。煙は小さな火の粉を従え、暮れかかる空に消えてゆく。と、庭先に自転車の音。

「焚火でしたか。でもねえ、これだけ煙を出すんだから一応届けて下さい。消防署から電話が入っちゃって……。もう終りですか？

早めに消して下さいよ。じゃよろしく。ハッ」

近くの交番のお巡りさんだった。敬礼に応えて、家族一同ペコンと頭を下げた。情緒も

幼い日の思い出もあつたもんじゃない。大あわてでバケツの水をかけたなら、ものすごい灰かぐらがたつて、皆の頭にふりかかった。

プロメテウスが女神アテネの助けをかりて天にのぼり、そのたいまつに太陽の二輪車の火を移しとつて、人間の贈物とした。

火。人間は火によって生まれ、火によって育ち、火によって発展してきた。また人は、この火に魅せられる。火は、人間の心の奥にある何かを揺り動かす不思議な力がある。

御神火信仰、火の祭り。すべての宗教には火が介在し、その行事の重要な役割になっている。

人間が火を手にしてから何万年が過ぎたの

だろう。しかし、その手にしている火は、す

べて酸素をとり込んでモノを燃やすことによ

り得ている。木を燃やし、炭を燃やし、動植

物の油を、化石となった石炭や石油を、ガスを、アルコールを……。

わたし達は、その繁栄の中で、このように火を自在に扱いつつも、時には手こずったり、その力にいためつけられたりしてきた。

これからも、火と共に喜び、火と共に悲しむ歴史をつなげていくにちがいない。

いま、人類は自分達で新しい火「太陽」を持つとうとしている。あのプロメテウスが空を駆けてぬすんだ太陽の二輪車の火を、自分達でつくりだしている。恒星のエネルギー源である「核融合」の火を、自分達の手にしようとしているのだ。いままで何万年の間、

わたし達のものにしてきた火と同様に、この新しい火も、またこれから先の人類の歴史の中で、人類を助け、手こずらせてゆくのだろうか。

小さな火が見える。思い出の中に見える。

人を思いゆく林間に焚火あり

山口青邨

二十一世紀にも、焚火はやさしく燃えてい

てほしい。

たき火

木元教子

放送キャスター＝茅誠司部会

火の美学 たき火の

前田 愛

立教大学文学部教授

巖谷 國士

明治学院大学文学部教授

子供の火遊びは最

初の禁止体験？

巖谷 前田さん、お住まいは……。

前田 ずっと藤沢です。

巖谷 僕は東京の高輪で生まれ育ったんですが、高校時代だけ藤沢なんです。湘南高校という……。

前田 私、その出身です。じゃ、貴方は僕の後輩だ(笑)。

巖谷 何か懐しいな……。いや、たき火というのは土地土地で多少違うようで、あまり一般的なことは言えない気がしましてね。福島出身の人に聞くと、東京人がイメージする落葉たきはないという。落葉は肥料にするも

ので、たまたま燃やすものがあって偶然にするのがたき火。しかも寒さが厳しいから、そんなもので暖はとれないそうです。瀬戸内の人の話では、芋なんて野蠻なものは焼かない。焼くとすれば餅であると(笑)。

前田 家に樺と古い藁があって、いまでも落葉たきをやってますよ。最近芋は焼きませんが……。

巖谷 僕のところもたまにやるんですが、最近はずいぶん文句が出る。焼却器を買えとか燃えるゴミの時にせとか(笑)。そういうことを言われる時代になってきたみたいですね。大人はもうたき火を喜ばない。もともと子供の世界のものみだ。いまの子供マンガにもたき火が冬の生活の点景として、小さな儀式みたいな形でよく出てきます。じつさ

いには、普段たき火なんかしないだろうけど。

前田 昔は子供の火遊びは厳しくとがめられていましたね。止められているから、一層こっそりやりたくなる。

巖谷 そう、火遊びするとオネシヨするとか……(笑)。一種のタブーですね。パシユールなどは、はっきりと火は最初の禁止体験であると書いている。

前田 火ということになると、パシユールの『火の精神分析』が極め付きみたいところがありますが、でも、あれにはたき火のことは出てこないようだ。

巖谷 そうなんです。大体フランス語にはたき火にあたる言葉が無い。日本語の「たき火」は響きのいい、きれいな言葉ですね。で

もこれをフランス語でいえば、「火を作る」としか言わないと思う。おそらくヨーロッパ人にとって火といえば、たき火よりも暖炉の火なんか先に来るんでしょう。

日本人の心に流れる風流のイメージ

前田 たしかに、たき火そのものが象徴的な、また、少年時代を呼び起こす懐しいイメージになるというのではないようですね。日本人の場合、謡曲の「紅葉狩」などにも取り込まれている白楽天の「林間に酒を煖めて紅葉を焼く」という一節、これが非常にポピュラーなイメージだったのでないかと思う——と過去形を使わざるをえない現状なんです

……。落葉で芋や餅を焼く、酒を温めるといった一種風流のイメージは、脈々と流れてきているような気がする。でも、あの詩ではたき火という言葉は使われずに、隠れたイメージになっている。紅葉の色がそれだし、酒はパシユラルにいわせれば「火の水」だ。

巖谷 日本人のたき火のイメージは、白樂天のあの詩よりもっと直接的に、子供のころ燃え上がる命みたいなものを初めから体験してしまう、もっと原型的なものだと言えるのかな。

前田 近代日本文学でたき火を扱った作品としては、志賀直哉の『焚火』が一つの極め付きですね。赤城山の鳥居峠付近で友人と白樺をたく、残った燵を暗い大沼に投げると、弧を描く火と水面に映る火が一つになった時、ジュッと消え去ると……。独歩にも『焚火』がある。夕暮、逗子の海岸で子供たちが火をたき始めるんだがなかなかつかない。そのうち伊豆の山に目が落ちて、海も山も巨大なたき火のように真赤に夕焼けする。やがて暗くなり、やっと燃え上がったたき火を残して子供たちは帰るんですが、年老いた旅人が通りかかってその火にあたる。最後にすべてが夜の闇にのみ込まれていく——子供と老人などはワズワズのモチーフをそのまま取り入れたのでしょうか、そこで火というのが

生命のシンボルであることが非常によく判かる。別に筋もなく、小説というより散文詩ふうの作品なんです。読むととにかくこちらに訴えかけてくるものがある。欧州ではどうなんでしょうね。

欧州では暖炉のだ らんらんが火の喜び

巖谷 大体、たき火ということだけで一つの作品になること自体、欧州ではまず考えにくい。ただ、自然回帰というか、町の外に出てゆく、未知の土地に触れるというタイプの文学があつて、田園や荒野でたまたま火をたくシーンはかなりあります。たとえばシャトーブリアンの米大陸を舞台にした作品には、たき火を囲んで食事するとか、インディアンの火祭り風なものを書いたのがある。西部劇のたき火シーンの祖とも言えます。

前田 じゃあ、シャトーブリアンの場合ですと、たき火そのものが非常にエキゾチックなイメージになるわけですね。

巖谷 そうだと思います。もちろん、欧州にも火祭りのものはあつて、古くはシラノ・ド・ベルジュラックの『月世界旅行記』で聖ヨハネの火によって月へ飛ぶなど、小説にもよく使われていますが、これはまず宗教的な

意味の火です。火の喜びとなると、圧倒的に暖炉にあたっているシーンに集約されてしまう。だいたい木の種類が違いますね。フランスには落葉になるような広葉樹が結構あるが、ドイツ以北は針葉樹で、たき火の風習を生むほどの落葉はない。それに寒いからわざわざ外に出て火を燃やしたりしない。

前田 家にもって暖炉の火をながめて一家だんらんする、というイメージですね。

巖谷 『マッチ売りの少女』も一本一本のマッチの束の間の小さな火に、暖炉の夢を獲得する。たき火とはちがうんです。

日本近代文学にみる「たき火五選」

前田 ところで、キャンプ・ファイヤーというのがありますね。まあ、普通のたき火もそうなんだけど、火を中心にして人が円陣を作るという形。これがかなり大事なことのような気がするんです。古井由吉さんは初期のころ『円陣を組む女たち』という短編もあつて、円陣に非常にこだわるわけだけど、同じ初期に『不眠の祭り』という短編がある。六〇年代の大学紛争を祭りに見立て、旧制高校のファイア・ストームのイメージを重ねたような作品ですが、そこで古井さんはこう見て

いる——中心にたき火があつて円陣で囲むと、皆、祭りの気分になってその中に溶け込むんだけど、この祭りというのは人を欺くんだと、言ってるんです。

巖谷 宮沢賢治が農学校で学生と芝居した後、火をたくのがありますね。例のダースコダーダーという。

前田 『原体剣舞連』ですね。あれはまさにファイア・ストームです。実はきょう、日本近代文学のたき火五選というのを考えてきまして(笑)。もう四つまで出てしまいました。独歩・直哉の両『焚火』、古井さんの『不眠の祭り』、いまの賢治の『原体剣舞連』、もう一つあります(笑)。佐藤春夫が戦後になって書いた『女人焚死』という実に不思議な短編なんです。信州の山奥で農家の婦人が自分の体を両側の木にくくりつけてたき火をたいて自殺する。実際にあつた事件が下敷ですが、割に突き放したかたちで書いていて、僕は戦後の佐藤春夫の作品では一番いいと思います。ちよつと異常で、われわれ日本人が共通に持っているたき火のイメージとは重ならない気もするが、女性が火に包まれて自殺しなければならぬというのは、かなり強烈な印象があります。

子供マンガにみる

たき火のシーン

巖谷 なるほど、いろいろあるもんだなあ。僕は児童文学、あるいはマンガと比べて大人の文学にはあまり出てこないような印象を持っていたんですが……。最近のマンガではテレビにもなった『うる星やつら』というのに出てくる。高橋留美子という二十代の人の作品ですが、日本の呪いとか神道的なもの、西洋の魔術、錬金術、異星人の超能力とか全部ゴチャゴチャになったマンガで、テレビでは全然面白くないが、原作はなかなかのも

のだと思います。子供たちがジョギングしてくると三叉路でサクラ先生というのがたき火をしている。イモを焼いているのかと思うとそれがイモリに変わる。途端に、先生は西洋の魔女風の巫女で、イモリを大釜で煮て惚れ薬を作っているシーンに移っていく。そのイメージの切り換えが実に見事なんです。あと、赤塚不二夫のマンガにはよく出てきますね。レレレのおじさんというのがいて、門の外でいつも落葉を掃いている(笑)。それが山になるとたき火をする。

前田 実際にたき火をする機会が無いから、いつそう、そうしたものに浮上してくるんでしょうね。



前田 愛

巖谷 作者の側ではそうだと思います。子供の側でも、たき火の実体験が無くても、その喜びが割と自然に伝わるものかなという気がしました。

火の呪力に対する

伝統は東西に共通

前田 ところで、米国には六十分間暖炉の火だけを映したビデオテープがあるそうですね。もちろんバチバチとはじける音も入っている。そして、これを見ていると心が安らぐというのでえらく人気があるとか。僕はびっくりしましたよ(笑)。

巖谷 面白いですね。それ必要なんですよ。米国でもかなり金持ちじゃなければ本物の暖炉は持てないですし、パリとかロンドンの様な古い町だと、暖炉はあっても中に火が入っていない。

前田 今は日本の床の間みたいになってますね。上にいろんな置物や骨董品などを並べてある。

巖谷 あれも仲々いいんですけど、だんらんを中心であった暖炉の記憶がああいうものを支えているわけです。米国などは新しい家が多いだろうから暖炉もなくて、そこでテレビで映す必要がある。

前田 日本の場合でも囲炉裏のイメージとかがあがるでしょう。

巖谷 僕なんかは東京の人間なので、火鉢がそうですね。あれもちよつと不思議なものです。

前田 今は火鉢というのは、とんと見かけなくなりましたね。僕の家では大きな火鉢の灰を全部捨てて金魚を飼ってますよ(笑)。

巖谷 どこもそうなんだな(笑)。うちは穴を開けて木を植えています。

前田 今まで火に使っていたものが、代わりに水や土を使ったりするんだからおかしいですね。

巖谷 火鉢というのは炭ですね。炭火とたき火ではだいぶ違うものだと思うんですが、炭が日本で普及したのはいつごろかな。

前田 『枕草子』なんかにも炭櫃、火桶という言葉が出てくるから、宮廷では平安時代から炭火で暖をとっていたわけだが、一般庶民に普及したのは、やはり江戸時代に入ってからじゃないでしょうか。

巖谷 たき火では燃えあがる炎が重要ですね。家の中の火が静かな炭火になったことで、囲炉裏での炎や燃えはじける音を求めて外に出たのがたき火になったと言えるかな。それとも、たき火そのものが以前からあったのか。

前田 かがり火じゃないかな。『平家物語』



ルを読んで、どうも日本人としてピンとこないのは、プロメテウス・コンプレックスといえますか、暖炉の火は父親の管理するもので、その火を父に代わって自分が管理することが大人になる一つの象徴であると、エディプス・コンプレックスとは違うかたちで父に対する気持を火で説明しているわけですが。

前田 日本の場合は逆じゃないかな。火の管理は母親の役割ですよ。それで思い出すのは藤村の『家』ですね。あれに強烈なイメージの囲炉裏が出てくる。大家族を一家の主婦が取りしきってるんですが、小さな天窓からかすかに青空がのぞく程度で家全体が暗い。囲炉裏の火が一日中盛んに燃えている。その管理者がまさに母刀自なんです。ですから、バシユラールの理論とは違うわけです。

巖谷 あれは、父なる神の宗教であるキリスト教との関係もあると思います。父性が神なのは地球上では珍しい部類でしょうけれど、それに欧州の言葉では火は男性名詞だけど、日本人にとっては、あるいは女性名詞かもしれない。

前田 火そのものには性的なイメージがあるでしょう。

巖谷 ありますね。オネシヨウんぬんも性的なおいがするし、火遊びとか燃えるとかいう隠語もある。古代人は火種を取るのに摩

擦熱を利用しますね。こすり合わせるとなる、そこに必ず男性的な要素と女性的な要素を考える。それが人間というもので……（笑い）。となれば、火にまつわるものはすべて性的かもしれない。

火のイメージは浄化、性的なもの……

前田 そう考えていくと、火というのは実に不思議だ。巖谷さんもご存知でしょうが、こういう時のタネ本として僕はよく『ザ・デア・イクシヨナリー・オブ・シンボリズム・アンド・イメージャリー』を見るんです。とにかくいろんなイメージをかき集めている変な辞典ですが、火のイメージは十六通り書いてあって、性的イメージも勿論ありますし、今まで話に出て来なかったのでは、浄化のイメージがありますよ。

巖谷 『マッチ売りの少女』なんかそれでですね。話は飛びますが、たまたま今日、国立近代美術館のベルギー象徴派展を見ましたら、たき火の絵が一枚ありました。レオン・フレデリックという人のあまり有名な作品ではないんですが、道と畑があつて火をたいている。西洋の絵では珍しい。近代美術館の専門家にちよつと聞いたら、「まあ、野焼きみたいなも

などの戦記では、武者が集まる時にはパツとかがり火をたく。暖をとるといよりは、一面、照明の役割のほうが大きかったのじゃないでしょうか。また、日本では二月堂のお水取りとか秩父の火祭りとか、いろんな火の行事がありますね。真言の護摩とか。つまり、火の呪力に対する古い伝統みたいなものが……。

巖谷 われわれのたき火は、その小型版をやつてるのかな。火の呪力そのものは人間の心理に受け継がれていきますね。となると、必ずしも東西の差ではなく、欧州にも当然あることだ。新年の火とか、地方によつていろいろ風習がある。『フェリーニのアマルコル

ド』の冒頭に新生活に入る段取りとして古い家具やワラ人形を燃やす祭りが出てきますが、ああいうのは割と一般的だと思う。必ずしもたき火でなくとも、火への思いということでも共通したものはありますね。

日本における火の

管理は母親の役割

前田 ですから、サヴォナローラの火あぶりとか、ナチの焚書とか、いろいろ思い出すわけですよ。

巖谷 欧州には魔女裁判の歴史があるから、火あぶりは身近だった……。でも、バシユラー

のじゃないですか」なんて言ってた(笑い)。火の真上に太陽が出ていて、人は一人も描いてない。

前田 欧州にも日本の野焼きに当たる風俗はあるんでしょうか。

巖谷 農業がある以上、それに似たことはあると思う。僕も見た記憶がありますが、イタリアあたりではやっているようです。

前田 野焼きは『伊勢物語』に出てくる。

駆け落ちした男と女が武蔵野にきて「武蔵野は今日も野焼きそ若草の妻も籠もれり我も籠もれり」と歌う。男女が睦み合う野遊びの季節と野焼きの季節が重なって恨めしいというわけなんです。野焼きの伝統は倭建命の草薙剣の話までたどれそうですよ。日本にしる中国にしる太陽の季節変動に合わせて火の行事があります。欧州でもそうじゃないんでしょうか。その絵なんか太陽の真下のたき火というのは、意識的な構図だ。

巖谷 それは何処へ行っても感じますね。まあ、この絵の場合は象徴派らしく、火がかなり性的なシンボルとして扱われていると思うんです。二十世紀ベルギーの絵でもルネ・マグリットなど、火が燃えている絵が多い。欧州では火の性的シンボリズム(中世以来の伝統として)があるし。

日本と西欧ではず

れる火のイメージ

前田 欧州と日本あるいはアジアとでは、どうも火のイメージというのは少しずれるよううだ。

巖谷 欧州は大体において寒いから、火についての感じ方がちよつと違う。それからキリスト教がありますね。

前田 キリスト教では火はマイナス・イメージですか。

巖谷 その辺はよく判らないが、少なくともキリスト教はある程度火の性を禁止する宗教だとは言えます。

前田 水は洗礼で使うけど、火そのものは例のソドムとゴモラが焼けるとか、非常にネガティブな気がするんです。

巖谷 終末論的なそれはあるが、一方、セント・エルモの火とかの美しいイメージもある。『白鯨』にしても、垂直に天に導かれるイメージとして出てくる。

前田 また変なのを思い出した。ライダイ・ハガードの『洞窟の女王』。アフリカの奥地に生命の火を浴びた女王がいて何百年も年を取らない。それが再び生命の火を浴びると一瞬にしてシワシワの老婆になってしまう話。

こういうイメージは非常に異教的、あるいは魔女的なんじゃないでしょうか。

巖谷 だいたい魔女というのが火の属性なんです。いろんな説がありますが、社会学的なことを捨象して言えば、古代欧州全体を覆っていた先住民族の母なる大地を信ずる宗教の祭司の生き残りが魔女だという見方。十九世紀のスコットやミシュレあたりから始まり、現在でも支持する人は多いわけです。実際、欧州のおとぎ話など読むと、だいたい火と魔女は結びついている。

前田 やっぱりね。

火が他者として存在する西欧文明

巖谷 はい。キリスト教にとっては異教なんです。たとえばロシアの民話にババ・ヤガーという魔女が出てきますが、ヴァシリサという継娘が火種をババ・ヤガーにもらいに行かされて森の中をさまよったりする。僕が子供のころ読んで驚いたのは家に火種が無いという(こと笑い)。よほど昔の記憶がおとぎ話に再現されているのか、あるいは社会的なタブーで火種を持ってない人びとがいたのか、その辺よく判らないですが。

前田 日本やアジアは違いますね。仏教や

ヒンズーには火葬がある。バリ島などでは非常に高いヤグラを築いて火葬するんだが、観光社が日を調べて連れていく。観光の対象にまでなっているんです。僕は嫌で行かなかったが実に壮絶なものらしい。あそこケチャダンスなどは火を中心に輪を作り何百人も踊ったりする。

巖谷 案外、西洋だけが特殊で火、火葬を禁止しているんじゃないでしょうか。西洋人の通俗的なエキゾチズムには、よく火のイメージが入ってくる。火のダンス、火祭り、かがり火を持つて回すとか。西洋人にとっては火そのものがエキゾチックなんですよ。

前田 つまり、自分たちが禁止しているからだ。

巖谷 欧州文化というのは、だいたい禁圧の文化ですね。火と同時に性的なものも禁圧している。それで精神分析みたいなものが出てきて、フロイト以来の展開があり、火をテーマとしたバシュラールの本も書かれる。ヨーロッパ人にとって火というものは、だいたい他者のものとして存在するから、エキゾチックに感じる人が多いんでしょうね。

●部会メンバー・アンケート回答●

たき火

今回の特集では、「火」について考えてみたいと思います。

「火」は人間の生活の原点として、人間社会を発展させてきたといえます。

その「火」に、わたくしたちは直接触れる機会がなくなってきています。

そこで、もっと素朴に、「火をもやす」とは何か。その象徴として“たき火”を取り上げました。

“たき火”の思い出、“たき火”ということからふくらむイメージ、あるいは、ご感想、その他をご自由にお書きください。

村上兵衛さん

作家／松本重治部会 国際交流研究部会



小生は東京の郊外の育ちですが、当時は多少の庭がありましたので、落葉を掃いてイモを焼いたり、栗を焼いて、ハゼるのを楽しみました。また暮れになると、一年前の不必要になった手紙類を、焚火でくべるのも、たのしみでした。

戦後のことですが、七輪で生活していたころ、火を上手に起こすものは、家を起こすとかいわれて、私は火を起こすことは得意で、友人たちとコンパなどするとき、よくメシ炊き係りをやりました。米の飯は、いうまでもなく、カマドか、せいぜい七輪で炊くのがおいしく、そうした人類の文化発生と同じ方法で煮炊きすることのたのしさを、この年になっても思い出します。

火を起こすことと、少し違うかも知れませんが、馬を走らせながら、馬上でタバコにマッチで火をつける方法を知る人も少なくなりました。……などと思うと、「文明」の空しさを思ったりします。

天地総子さん

歌手 タレント／加藤芳郎部会



秋の夕暮れ時、枯れ草や木の枝を集めて、ジャガイモやサツマイモをたき火で焼きながら遊び、その煙に包まれて家路を急いだ幼頃の思い出。その「たき火」の香りこそ、故里の香りとも言えましょう。

戦時中、私共の家族は東京を離れ、静岡県清水市の漁村にある妙生寺に疎開しておりました。澄み渡った空に青い海、胸一杯にすいこむ空気が身体の中を全てきれいにしてくれるような感じさえもする。そんな夕暮れ、遠くでもやす「たき火」の匂い。

大都會の真中で生活する私にとって「たき火」のイメージは、一口に言って、故里の懐かしい情景を思い起こさせます。

過日、その妙生寺に訪問した時、何処からともなく匂うたき火の香りに、幼い頃の思い出が懐しく浮かんで来たのでした。



川喜田二郎さん

筑波大学教授／加藤秀俊部会 松本重治部会

ここ十五年来、イロリ哲学なるものを考えている。

イロリの効用箇条書き

一、暖かい。

一―一、前が暖かく、後が涼しい。

一―二、小手をかざして温められる。

一―三、逆向きになって背を温められる。

二、火に中心性がある。

三、火に清浄感がある。

四、火を見つめると原始的な心になる。

四―一、無心になる。

四―二、深く物事を考えたり、自分を見つめたりできる。

四―三、物事を裏表往復しながら考えられる。

四―四、新鮮な発想をする。

五、心が本当に寛ぐ。

五―一、しゃべり続けている必要がない。

五―二、黙っていても隣の人に悪くない。

六、イロリ仲間ができる。

六、イロリ仲間ができる。

六―一、何人かが火を囲める。

六―二、イロリ仲間との心の壁がなくなる。

六―三、飾らず他人と話せる。

六―四、いいたいことが、いいやすい。

七、火に動きのあるのがよい。

七―一、ソダなどをつぎ足し、火の世話を要する事がよい。

七―二、自在鍵の煮物に気を配ったりする事がよい。

八、火の要心などで心がひきまゐる。

近年イロリの消滅した事は、戦後日本の最大損失のひとつ。

イロリ機能の代用品は、まだ人類に出現していない。



青空うれしさん

テレビタレント／加藤芳郎部会

幼年時に隣家の火事、空襲のあの炎……火は恐ろしいものという印象でしか……それが京都の大文字を見て初めて美しい!! と思つたものです。

坪内ミキ子さん

俳優／加藤芳郎部会

アパート住いのため我家では出来ないが、

姑の住む茅ヶ崎の家に行くと、息子と私は狂

つたように枯葉を集めてたき火をする。枯葉

のある時期はルンルンだが、春や夏にはもや

すものを集める方が時間を食ってしまった

する。それでも血眼になって松葉などをかき

あつめ火をつける。どうして二人とも、こん

なにたき火が好きなんだろう。やきいもの魅

力? それもはじめのうちは確かにあつたが、

今ではおまけは排除している。放火の犯人と

まちがわれるからもうやめておきなさいよと

いうのに、息子は、もえるものがなくなると

新聞紙を何枚もやして灰を舞い上らせたり

している。私は、お線香とかたき火とか、何

しろ煙のにおいが好きで、たばこを吸いはじ

めちゃったくらいだから、あの、何ともいえ

ない郷愁をそそるようなたき火のにおいに魅

せられているといえるかもしれない。そう、

多分、たき火には郷愁があるのだ。それと、

人間が先天的、潜在的に持っている火へのあ

こがれ、欲望(そんなものを持っているのは

我々親子だけかな?)を満してくれるのでは



渡辺文雄さん

俳優／加藤芳郎部会

旅から帰っていい旅だったナアと思える時

には、間違いなく良い水と、良い火に出会っ

ています。

その火は囲炉裏の火だったりたき火だった

りしますが、良い火に会うためには旅に出な

ければ駄目というのは悲しいことです。

いい水やいい火を眺めている時は、いつも

はすごいスピードで流れていくボクの中の時

間が止まります。そして自分がやさしくなぐ

さめられている事に気がつきます。

いつの日か、水辺の良い火のある家に住み

たいというのがボクの夢。

ないだろうか。何しろたき火大好き人間なの





宮本千晴さん

近畿日本ツーリスト㈱日本観光文化研究所
員／加藤秀俊部会

火は私にとって長い間子供の頃かまどの前へへばりついてあきることなく見つめ、手を出していた炊事の火でした。ごうごうと煙道の中に身を躍らせる炎、力なくかろうじて炎の色をたもつ残り火、釜の底にまたたく煤の星、ガスを吹きだして鋭く反応する木、はせる竹……火こそ、人間に後に発見するさまざまな化学物理的な世界を予感として教え準備させた最良の教師だったのでしよう。

その火を最も切実な生命の守り手として意識するようになったのは、むきだし自然の中へ、裸に近いかっこうで出かけるようになってからです。ガソリンストーブの青い炎のうなりは、多くの人びとに生かかえったような安堵の念を与えたことでしょう。ローソク一本の炎をむさぼって露営したこともあります。しかし、何といつても心強く、人を励まし、もてなしてくれるのは焚火、木を焚くことです。火を焚くことで現代人も自然の中にまだ戻れるところがあることを実感できるとはいえないでしょうか。

しかし、山から焚火は追い出され、庭もゴミを焼けるほど広いものではなくなりました。そして空も煙を吸収しきれなくなるほど高いものはなくなつたように見えます。人びとはゴミを自分で処理することをやめ、わずかに専売公社に金を払い、自分の肺を傷つけながら、個人的な焚火を続けています。

でも、できるなら、ゴミは自分で処理し、子供たちにもあの火の躍りを見せてやりたいもの。空はほんとうにそれを許さないのでしょうか。



尾関通允さん

著述業 自由学園講師／茅誠司部会

ぬくもり、人間生活、秋、落葉、自然、われわれが都市生活の中で失ったものへの郷愁、そして近代都市のさむざむとした光景——そういったことを連想します。そういうものから遠ざかるにつれて人間は野性味を喪失し、衰退していくのかな、と考えます。

キャンプファイヤー、どんと焼きなどを懐しむのは年のせいかもしれません。もつとも、わが家の近くにはまだ武蔵野の面影がわずかながら残っており、落葉を焼く姿はしばしばみることができます。



村田浩さん

日本原子力研究所顧問／茅誠司部会

「たき火」といわれて、まず思い出すのは、小学校五、六年生の頃、ボーイスカウト「虎」班の一員として参加したキャンプでのたき火、キャンプファイヤーである。場所は大連から旅順への鉄道の間にある夏家河子（かががし）。ここは遠浅の海で、夏の日は海水浴で賑わうところ。その海水浴場からかなり離れた雑木林のほとりにテントを張り、炊サンをし、飯ゴウ飯を食べ終わるとキャンプファイヤーをたいて、その周りを囲む。その頃には陽もとっぷり暮れていて満天に大陸の星が輝く。班の指導者であり学校の受持担当の訓導であった武午師先生のお話を聞く。また当時「天文学博士」と仇名された班員の大来佐武郎さんから星と星座についての話があり、顔や手を火にあおられながら耳を傾ける。

少年の頃の想い出は、いつでも楽しいものだが、真暗なヤミをつらぬく焰の変貌自在な動きを見てみると、遠い昔の大陸でのキャンプファイヤーが懐しく思われる。幼い頃「天文学博士」とよばれた大来さんは、その後電気工学士となり、さらに経済学博士となら

れ、21世紀フォーラムの設立者の一人として東西南北にご活躍中である。自分もまた幾多の移り変りを経ながら、眼に美しく肌に暖かいたき火の火から、眼に見えない肌感じない放射線を出して燃える原子力の世界に身をおくこととなった。夏家河子の海浜のたき火にあたってるときには思いも及ばなかったことだけれども。



加藤芳郎さん

漫画家 漫画家協合理事長／加藤芳郎部会

庭のスミにたき火用の炬があります（焼肉用だったので、殆どそれ用には使用しませんでした）。三日に一度は黒い煙（ピニールや発泡スチロールなど）を出さないようにして紙くず類を燃やしております。「たき火」は私の趣味の内ではゴルフより上位にあります。秋、冬の「たき火」は勿論ですが、真夏の炎天下に汗びつしよりの「たき火」も好きです。燃える火を見ながら、何も考えないのもよし、イロイロと瞑想するのも良しです。明日も、夕暮れ前に落ち葉を集めて、たまつた紙くずといっしょに「たき火」する予定になっております。



伏見康治さん

名古屋大学・大阪大学名誉教授／茅誠司部会

いわゆるマンシヨン生活にはいつて九年。

ものを燃やすというチャンスは完全に失った。昔なら自分の手で焼却処分にした可燃ごみも全部、ごみ処理場に持参、これが遙々市役所の手で、遠くの地に運ばれて処分される。マンシヨン生活というのは、あらゆる意味で、人間生活を支える基礎的条件から人間を遠ざけてしまう仕組みになっている。このことから、私はマンシヨン亡国論を唱えるのだが、娘が草木染に凝っていて、先日の台風来襲の後、折れて落ちた樁の小枝をその辺（というのにはマンシヨンの内庭とか、少し離れたところにある一時代前の住宅街の庭）から掻き集めてきて、それを焼いた。焼いた場所は近くのお百姓さんが最後までがん張って住宅会社に売り渡さなかった、しかし使いものにならない空地であった。ひさしぶりにたき火のほびをかいた。娘によると、樁の灰は媒染剤としてすぐれているものだという。



ロミ山田さん

歌手 俳優／加藤芳郎部会

小さい頃は関西の京阪神地区、芦屋とか夙川に住んでいました。当時は近所に広い野原が沢山あって、枯枝を集めてはたき火をしたものです。すると方々にちらばっていた子供たちがワーツと集まってきて、火をとりかこみます。子供にとつてたき火は、ほんとに魅力的な胸をわくわくさせるものでした。時々、みんなかけ出して家へ帰り、おいもを持ってきて火の中へうめてもらいます。ふざけながら、枝の先を火の中へつっこんでおいもの焼けるのを待っている時の楽しい気持ちは、今でも思い出します。

火というのは、人の心もあたためるものですね。この頃はたき火の出来る野原もないし、家も庭のないマンシヨンになってしまつて、落葉をかき集めてのたき火をすることも出来なくなりました。すべてに情緒のなくなった今、ひとしお子供頃のたき火がなつかしく思い出されます。

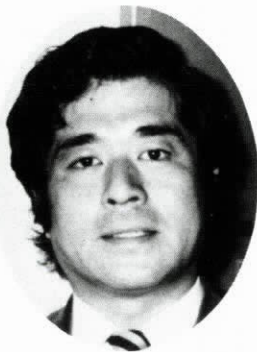


松原秀一さん

慶応義塾大学文学部教授／国際交流研究部会

高層建築からは厨房のガスも禁じられ姿を消して行き、直か火はかろうじて食卓のキャンドル・ライト位にしか生き残っていませんが、火を焚くのは人間の根元的な楽しみでしょう。焚火と云うと戦前の庭の落葉焚きが想われます。家を建てる時、これだけは無理をしてサロンに作った暖炉に時々火を入れ、なかなか手に入らない薪をもして火をながめるのが楽しみです。客も火をいじることを楽しみ、特にヨーロッパ系の人は喜びます。

木の燃える香りも良いものですが、二酸化炭素が増えることが心配となってきた地球ではあまり拡げてはいけないうたのしみでしょうか。



松平定知さん

NHKアナウンサー／加藤芳郎部会

煙・匂い・夕空・大晦日・夕方・年上の女・鈴・笑顔・チョコレート・小学校四年生。
「たき火」から拡がる私の連想の輪です。

× ×

小学校四年生。私は母の手伝いをよくする好少年でした。大晦日の夕方。家の前の道で、大量のゴミを枯葉と一緒に燃やしていると、そこに、女の人が通りかかりました。赤いセーターの、ポニーテイルの、真紅の口紅の、美しい人でした。「お手伝い？えらいのね」と、鈴をこがす様な声でその方がいい、ニコツと笑って通り過ぎていきました。私はその場に立ちすくんで、その方の後姿を見送るばかりでした。

半時間も経つたでしょうか。あの方が、帰ってきました。「ハイ、ごほうび」あの方は、そういつて、持っていたチョコレートを私の手に握らせ、あまつさえ、私の頭を、そつとなでていきました。
「たき火」の、あの匂いをかぐ度に、二十七年前のこのシーンを、いつも、鮮明に思い出します。その頃、二十二、三に見えたあの方の、その後の消息は全く、わかりません。春でも、夏でも、秋でも、ゴミを燃やして、枯葉を集めてたき火をしますけれど、たき火は、何といつても、大晦日の、それも夕方に限ります。

君は長島を見たか

岩川隆／集英社文庫



2001年文庫◆

◆FORUMS FORUM

「原・石毛・中尾といった新しい力の加入

に心はずませている方もいらっしゃるでしょう

う。然し、ON抜きのプロ野球の開幕に、何

かこう、途方に暮れている方も多いのではな

いでしょうか。今年のプロ野球は愈々、今日

開幕です」——昭和五十六年四月四日。NH

K朝のニュースワイド・スポーツコーナーで

私はこう放送した。当時、私は、これと「歌

のビッグステージ」という番組を担当してい

た。「歌の——」は、毎週火曜日、夜八時から

のナマ放送であった。そして、あの、昭和五

十五年十月二十一日は、火曜日だった。「長島

監督が巨人をやめました」——私がこう第一

声を発した時、NHKホールを埋めた三千人

の聴衆のあのドヨメキを、私は忘れることが

出来ない。(付記すれば、王選手引退のニュー

スも十一月四日の火曜日だった)

『キミは長島を見たか』岩川隆著。集英社

文庫。四百四十円。

例によって風呂場読書。風呂桶に渡した板

蓋の上には、タオル、ミカン、コーラの大瓶。

四百十五頁。滞留風呂場時間三時間強。外は

雨。プリリアントな休日の午後。

少年時代。私のおやつは《紅梅キャラメル》

だった。どんな味だったかは忘れたが、それ

を買うと、巨人軍の選手の写真が入って、

それを何枚か集めるとクラブやバットが貰え

た。私の《巨人軍病》は、ここに始まる。

× × × × × × × × × × × × × × × ×

『長島茂雄は、監督時代に、一試合一試合

に全力を投入し、全試合を勝とうとした。ず

るく計算して、総合点で得をしようというよ

う「ちよつとなア」と思う様な所が、この本

には数箇所ある。然し、そんな所でさえ《巨

人軍病》・《長島病》の私は、一寸、ニヤッと

する程度で読みとばす。私のこの《病》は重

い。そして治る事はない。来年も再来年も二

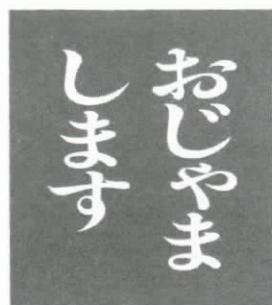
〇〇一年も。巨人軍も、長島も、王も、私の

この《病》も、みんな、みんな、永遠に不滅。

松平定知 || NHKアナウンサー || 加藤芳郎
部会

◆2001年文庫◆

◆FORUMS FORUM



松本重治

さん

(財)国際文化会館理事長
|| 松本重治部会



六本木の国際文化会館四階が、松本重治先生とご長男一家のお住まい。夕方のお茶の時間におじやまして、先生の大好き物のエクレアをいただきながらお話をうかがいました。

— 家族をご紹介いただけますか。

松本 長男の洋(国際協力推進協会勤務)、その嫁の敏子、その子供のゆう、高校二年生。近くに住んでいる長女の操は横文彦の家になっています。操の子供は女の子二人で、みどりとなおみです。みどりは上智大学の一年生、なおみは高校一年生。次男は健(新日鉄勤務)、健の嫁の純子、子供は浩という男の子でこの十二月で五つ。孫は四人。二、三週間一度は必ずここにやってきました。

— 松本先生はどの様なおじさまでしょうか。

洋 父は孫を猫かわいがりするというよりは、一つの人格として大人と対等に扱うという感じがありますね。ですから、孫を目に入れても痛くないとか、欲しいものは何でも買ってあげるというおじいちゃんではない。
敏子 めちゃくちゃに甘やかさないから、親としてはありがたいですね。

— ゆうさんにとってはどうでしょうか。
ゆう グラン・パに学校や友達のことを相談して「ああ、わかるよ」と言ってもらえるとかとなく安心感があるし、頼もしい感じがあります。結構、父よりもわかってきている

かもしれません。

洋 通信簿も親より心配して見せろ、見せろって言うほうです。

松本 前よりもいい成績になっていると、二人でお寿司を食べに行く。

敏子 ゆうとのデートです。まさに(笑い)。— お父様としては……。

洋 私は中学生の時、勉強をしないんで一度だけしかられて泣きましたね。あとはあまりしなかったことがない。

松本 しよつちゅうじゃない、一回きり。

敏子 それが効くんです。ですからゆうも、ある意味では怖いって言うんです。つまり、黙っていても全部お見通しという感じが怖いんですね。

洋 それに、あまり感情を外に出さない。私は秘書に気を使わずに怒鳴りますけれども、父は誰にでも優しくして、仕事に不満があっても表面には表わさないんじゃないでしょうか。秘書とか部下に対しても、怒鳴ったことはないでしょう。

松本 ぼくの方が悪かったと謝るね。すると向こうは調子が狂っちゃう(笑い)。それとしかつても同じような結果になるだろうと思うからね。ぼくはしかし、あまり愚痴を言わないんじゃないかね。

敏子 おっしゃらないですね。

松本 いい人がこの国際文化会館に入ってきてくれてみんな献身的にやってくれるので、仕事では何の苦勞もないんです。ぼくはね、

三十年程前に八掛見に見てもらったら、あなたはお金がたくさん入るけれど、みんな出ていってしまう。そしてだいたい国際的な仕事をやるだろう」と言われた。その通り、お金は入るけれども出ていってしまう(笑い)。
— 現在、ご執筆活動はいかがですか。

松本 ぼつぼつ。昨日もちょっと書き過ぎて疲れたような気がしますけれども……一生懸命やっています。

— どの様なものをご執筆中でしょうか。
松本 ぼくの生涯を三つに分けると、上海時代と開戦前後、そして国際文化会館のことになる。ですから、一巻目は連合通信とつづいて同盟通信の記者としてやってきた六年間の上海時代の回想録。二巻目は、今、何という題にしようかを考えているんですけども、同盟通信の本社編集局長時代のことを書きたいと思っている。特に日米開戦前後のことをね。それから三巻目は、国際文化会館の三十年史。もう創立前後のことは八分通り書いてあるんですけど、始めの頃のことはほとんどしかわからないから……。

— 毎日少しずつお書きですか。

松本 いや、執筆にあてているのは、ほとんど土曜と日曜日。ウィークデーは人に会ったり会議をしたり。夜は六時頃にお風呂に入ってからウイスキーの水割りを一杯ゆっくり時間をかけて飲んで食事。それから本を読んだり、テレビを見たり。夜はあまり出なくなってきたか

ら仕事は半減しましたね。

——テレビは毎日ご覧になりますか。

松本 毎日見ます、テレビドラマも時代劇もいろんなものを。「大江戸捜査網」と「峠の群像」は必ず見えています。それからニュースやニュース解説はできるだけ見るようにしています。目が弱ってきたから、新聞を細かく読むよりテレビを見たほうが早いしね。

——ところで、松本先生というパイプというイメージがありますが、パイプは何本くらいお持ちですか。今もお手元に三本ほどございますね。

松本 三十本以上あります。もう五十年以上もパイプを吸っているから、友だちにももらったものが積もり積もったんですね。

敏子 人からいただいたものですと、重さとか口当たりとか微妙なところで好みに合わないらしくて、何本もあるうち実際に使って



フォーラムズ・インタビュー

いるのは五、六本のようにです。

——パイプの葉にもお好みがおありですか。

松本 もう三十年、ハーフ・アンド・ハーフ。三、四十年吸ってみて、舌や咽喉にあまり影響しない、ということかな。

敏子 お父様とパイプは離せない、という感じですね。パイプがないと間が抜けちゃって(笑い)。

——ご趣味は音楽鑑賞とゴルフとうかがいましたか。

松本 ええ、音楽は非常に好きです。若い頃からずっとクラシック。ピアノやオーケストラなどを中心として、モーツァルト、シューベルト、ベートーヴェン、ブラームス……何でもいいの。家内がピアノが好きだったから……。以前は音楽会にも家内とよく行ったんだけれども、夜に出なくなってきたからここ二、三年行ってないね。

ゆう 私のもっぱらグラン・パの恩恵に預かって、クラシックのコンサートにはできるだけ行っています。

松本 ゴルフは仲間の友だちがみんな亡くなられたので、ここ二、三年やっていない。ゴルフはいい友だちとじゃないとおもしろくないからね。

洋 ぼくは父からゴルフを教えてもらったんです。そのせいか、今だにちっともうまくならない(笑い)。

——もうすぐクリスマスですが、いつもどのようにお過ごしですか。

洋 クリスマスは母が亡くなってから、あまりやらなくなりました。以前には親しい方たちをお呼びして、下の国際文化会館でよくクリスマスパーティーをやりました。

松本 仲人したカッブルを十組くらい呼んだかな。クリスマス・イブにね。

——お正月は。

洋 正月はやりませう。

敏子 元日に、バラバラになっています家族全員が集まって、お昼をいっしょにいただきます。

松本 ぼくはね、二十一世紀に生きのびるような人間と一緒に暮らせるのが楽しいんです。

——先生は十九世紀のお生まれ。

松本 そうなんです。

敏子 二十一世紀には、お父様はおいくつかしら。

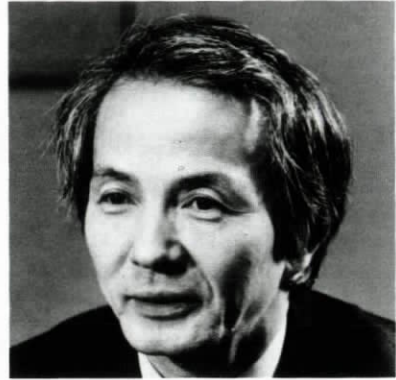
洋 百二歳。

松本 一八九九年の生まれだからね。

朝起きてから寝るまで、きつちりとネタタイを締めていらつしやるという松本先生。ピアノの上に飾ってある亡き奥様のお写真をご覧になるお優しい目かとても印象的でした。

〈松葉千恵美〉

FORUMS FORUM



●目下謹慎中です●

米山俊直さん

今年は何年でした。考えてみると五十二歳で、ちょうど十年おくれで本厄にぶつかったようです。昨年九月以来のモントリオール滞を終えてから、四月二十一日からアメリカの中西部―東部の大講義を講演、セミナー、シンポジウムのハシゴをして歩き、十日ほどの暇をみつけて旅立った旅先のベルーで高山病を発病、六月はじめに日本に直行して東京で入院。一カ月あまりいました。あと京都にもどって一週間後にこんどは痔の手術で入院、三週間入院してました。幸い予後は調子よく、CTスキャンや脳波、心電図な

京都大学教養学部教授 加藤秀俊部会
 ことから、コレステロール、中性脂肪、血糖値、さらに血圧なども正常で、後遺症はないようです。ついでに呼吸器系、消化器系の検査も受けましたがこちらも異常なし。体重も十キロ減って標準値になりました。

そんなわけで、夏のアフリカゆきの計画もつぶれましたが、秋から日々に日常生活にもどっています。約束していた「エナジー対談」を樺山紘一氏とやったのを皮切りに、会議、講演、外国の学者の通訳、講義と、ひとつずつハードルを越えている感じです。伊谷純一郎さんに

肩代わりをしていただいた「アフリカ・ハンドブック」の編集もすすみ、七〇年代のアフリカ調査の報告書も出版の目途がたちそうです。
 秋の学期からの講義の再開で、ゼミと実習は二倍の時間をまかされています。ゼミではこの六月刊行した大林太良・綾部恒雄両氏と共編の『文化人類学入門リ―ディングス』を読み、実習は今週の「鞍馬の火祭り」をはじめとして「終り天神」までの京都の町の行事を追跡して、来年に予定している十年ぶりの祇園祭再調査につなぐ計画でいます。この秋にはPH Pから『関西再発見・大和から河内への旅』を出します。厄おとしをして、新しい年をむかえたいと思っています。

●生活人たるや容易ではなし●

橋口 收さん

経済評論家 茅誠司部会

九月中旬に公職を退いてからの閑日月を、という編輯のご注文らしいが、それが、けっこういそがしい。

まずは、九月下旬に一週間ほどアメリカ西海岸に行った。まったくの遊学であ

ったが、ここ二十年間のご無沙汰であったので、肌で感じるものは有益であった。

十月中旬から下旬にかけて十日間ほどは、ポルトガルとスペイン（主として南部）に、はじめて旅行した。家内といっ

しよに、グループ・ツアーに参加したが、なんとなくぼんやりとのんびりしたりリスボンの美しさ、スペイン・アンダルシア地方のこくのある、中身の濃い文化の堆積を心ゆくまで(?)堪能した。「リスボンは異国の感じがしないわ」という家内の感想は、日本とポルトガルとの交渉の深さを、思わず知らず直感したものかもしれない。
 日本にいるあいだはどうかという、在職中の後始末や、送別会、「もう自由に





なられたからいいでしょう」ということでの、講演や執筆の依頼にいそがしく追われている。かつては、手帳を持たないことで意気がついていたが、いまではそうもいかず、手帳こそは、いのちのつぎに大切なものとなっている。それには、原稿の締切日や必要枚数も、もちろん記入されている。

それやこれやで、せっかく裏庭に建て

た書庫が、あくびをしているのが残念だ。身体ひとつはいるくらいの小さなものだが、それでも二千冊以上は収容できるので、終日の読書に耐えるべく、空気とりの小孔まで用意したが、半日間利用したのが、数日しかない。したがって、退任後読んだ本は、在職中におよばない。これはどうしたことが、と思わないでもないが、そのうち静ひつの日がやってくる

にちがいない。たまたま家にいると、電話のかかること、速達その他、キンコンカン」の多いこと、おどろくほどである。「生活人たるや、容易ではなし」これが、私の近況である。

●ロシア式風邪治療法●

吉川 光さん

NHKモスクワ支局長 国際交流研究部会

NC9のニュースデスクを八月で辞めて、十月三日から、またモスクワに來ています。今度は九年ぶり、三回目のモスクワ勤務で、前回の時と同じアパートに住み、同じ事務所です仕事をしています。

そんな訳で、もうモスクワ生活のことなら何でも識っているつもりでしたが、

そんな訳で、もうモスクワ生活のことなら何でも識っているつもりでしたが、出発した日の東京が二十度を越える暖かさだったのに比べて、九時間後に到着したモスクワは、早くも三度という寒さだったので、すっかり風邪をひいてしまいました。

モスクワでは十月十日に初雪、十九日からは吹雪となり「一年のうち半分は冬

NHKモスクワ支局長 国際交流研究部会というロシア特有の永い冬に入りました。「初雪の早い冬は寒い」といわれていました。

暇ができるかと独りでモスクワの街を歩き廻ったり、友人を訪ねて旧交を温めていますが、風邪をひいている私をみて、ロシア式風邪治療法を教えてくださいましたのでご紹介します。

①まずジャガイモを皮のままゆでて、お湯は捨て、毛布をかぶってその湯気をおう。②熱いお湯の中にカラシを入れ、ヒザまで足をつけて赤くなるまで我慢する。③紅茶の中に夏にとって干してあった菩提樹の花を入れてのむ。とても香り

がよいそうです。④生の大根に穴をほり、その中にハチ蜜を入れて大根の汁とハチ蜜が混じったものをのむ。⑤ウオトカにとうがらしを入れてのむ(大人用)。⑥玉ネギを輪切りにし、砂糖をかけ二、三時間たつてからそのまま食べる(子供用)。⑦夏の間にとつて干しておいたカラビーハ(電気草)か、マーチイマーチハ(実母と継母)という草を三時間ほどお湯につけてのむ、というのだそうです。

このうちとうがらし入りのウオトカは日本でも知られていますが、「実母と継母」という草の名前が気になりましたので尋ねてみますと、その草は円い葉の表には柔かくて温かい毛が生えているが、裏側は冷たくて何も生えていないので通称「実母と継母」と呼ばれているとか、お伽話を聞いているような気がしました。

私の近況 私の近況 ◆

◆ FORUMS

FORUM

第10回大来佐武郎部会

昭和57年9月24日



大来佐武郎部会では、毎回メンバーが自身の専門分野のテーマで講演し、それについて討論を行なうという形式がとられている。今回の講師は、上智大学比較文化学科教授、ロベール・J・パロン氏。テーマは、*Japanese Decision Making* (日本の意思決定)。講演、討論ともに英語で行なわれた。

西洋のビジネス機構における意思決定過程と日本のそれとを「To decide, When to decide, What to decide, Who decides, How to decide」の五点から比較・分析する。欧米人には概念的方法が合うが、日本人の性分には「打ち合わせ」「根回し」を経てから意思決定が行なわれる現実的方法が合う。しかし、この比較的アプローチは対比によってもう一方を的確に照らし出す方法であるため、どちらが良いかという問いには適さない。

なお、今回の出席者は、大来佐武郎、北原秀雄、篠原三代平、松山幸雄、(敬称略)でした。

第11回大来佐武郎部会

昭和57年11月8日



日本の国際化が叫ばれてから久しいが、国際化のためには他国の特徴を知ることが重要である。そこで今回は「経済開発の明暗」と題し、アジアにおける経済開発の現状を、実践大学経済学部教授、篠原三代平氏に伺った。東南アジア、東アジアが低開発国でも優等生の部類に属すのではないかと思われる明るい面が二つある。第一は、国内総生産に対する設備投資の急速な高まりに伴う、産業の工業化と輸出面での工業化(投資主導型の成長)。第二は、グリーン・レボリューションの進行、灌漑、そして二毛作や三毛作の拡大による精米生産の伸びである。

同時に、暗い面として農業労働者の実質賃金の低下という事実がある。その理由としては、人口の増加による土地の細分化、グリーン・レボリューションによる従来の農業制度の破壊や農村協同体の崩壊などがあげられる。なお、今回の出席者は、北原秀雄、木田宏、小林陽太郎、松山幸雄、(敬称略)でした。

第15回茅誠司部会

昭和57年11月24日



海洋は太陽エネルギーの宝庫であり、はかり知れない潜在エネルギー量は、二十一世紀のエネルギーとして関心を集めている。

第十五回を迎えた茅誠司部会では、海洋エネルギーの中でも供給源として最も可能性が高いといわれている海洋温度差発電をテーマに選定した。講師は、東京電力株式会社技術開発研究所長の三井恒夫氏、並びに、同副所長の伊藤文夫氏。

海洋温度差発電(OTEC)の原理は以下の通りである。フロン液を表面層の温海水により熱交換器(蒸発器)で加熱してフロン蒸気とし、タービンを廻して発電する。タービンを廻して出てくるフロン蒸気は、深層の冷海水により熱交換器(凝縮器)で冷却して再び液体とする。そしてこれを繰り返す。現在、ナウル島試験プラントにて実証試験中である。なお、今回の出席者は、茅誠司、尾関通允、木元教子、伏見康治、松根宗一、村田浩、(敬称略)でした。

◆新メンバー紹介◆

◆FORUMS FORUM

国際交流研究部会 ■

高平哲郎さん フリーライター

テレビ番組の構成を本格的に始めて、まだ四年くらいだと思います。それまでは、コピーライターをふり出しに、雑誌の編集、それからフリーで、単行本を編集したり、レコードをプロデュースしたり、CFを作ったり、まあ、いただける仕事で喰いつなぐ二十代でした。中でも、いちばんサマになったのが、雑誌でやらせてもらったスターさんのインタビューで、これは、現在も続けておりますが、とりあえず二冊の単行本になっています。

現在、仕事の六割から七割はテレビのバラエティ物の構成にあてられています。残りの何割かは、相変わらざインタビュー、レコード・プロデュース、雑文……ともかく、来る仕事はあまり断わずに、お受けしているというのが現状です。

こういう集団には、明らかに異質なわけですが、四月から何か月間かテレビの番組で付き合い合っていたいたダーク・ダックスの喜早さんに、なんとなく魅かれて末端を汚らせていただいている次第です。

この国は、どういうわけか肩書きをつけたがったり、出身校や経歴でその人を判断しがちですが、二十代のころから、そういうことが嫌いで、肩書きを拒否し続けてきました——
ま、実際の話、肩書きといえるようなちゃんとした仕事もしていなかったのですが。

いまは、なんとなくフリーライターとか放送作家と名前の下のカッコの中に入ることが多いのですが、広告関係の人、雑誌関係の人、映画関係の人と仕事柄、いろいろ付き合わせてもらって、いちばん居心地がいいのが放送関係の人たちだという気がしています。

どうも、昔から他人の紹介は得意なほうなんです。自己紹介というのは性に合っていないようです。ひとつ確実なこと、いまの自分を支えていることがあるとすれば、それは東京生まれだということだけでしよう。生まれた場所に貴賤も天馬船もないとは思いますが、本当に他の地で生まれなくて良かったと思っと思っています。

◆新メンバー紹介◆

◆FORUMS FORUM

発起人

内田 忠夫 東京大学教養学部教授
加藤 秀俊 学習院大学法学部教授
加藤 芳郎 漫画家 漫画家協合理事長
茅 誠司 東京大学名誉教授 日本学士院会員

加藤秀俊部会

テーマ 日本の中の村の将来

小松 左京 作家
東畑 精一 東京大学名誉教授 (財)政策科学研究所顧問
中山伊知郎 (故人)
松本 重治 (財)国際文化会館理事長 向坊 隆 原子力委員会委員長代理 前東京大学総長

加藤芳郎部会

テーマ 日本の中のバイバル

加藤 芳郎 漫画家 漫画家協合理事長
青空うれし テレビタレント
青空はるお テレビタレント
天地 総子 歌手 タレント
大山のぶ代 俳優
大和田 獏 俳優

岡江久美子 俳優
加治 章 NHKアナウンサー
川野 一宇 NHKアナウンサー
久米 昭二 NHKディレクター
黒川 和哉 NHKディレクター
小島 功 漫画家
砂川 啓介 俳優
鈴木 義司 漫画家 漫画集団所属

茅 誠司部会

テーマ 明日のエネルギー

有澤 廣巳 東京大学名誉教授 (社)日本原子力産業会議 会長 日本学士院院長
生田 豊朗 (財)日本エネルギー経済研究所所長
稲葉 秀三 (財)産業研究所理事長 経済評論家
内田 忠夫 東京大学教養学部教授
大島 恵一 (財)工業開発研究所所長

尾関 通允 著述業 自由学園講師
金森 久雄 (社)日本経済研究センター理事長
木元 教子 放送キャスター
五代利矢子 評論家

齋藤 志郎 日本経済新聞社アジア 総局長
三枝佐枝子 評論家 商品科学研究 所所長
高原須美子 評論家
富舘 孝夫 (財)日本エネルギー経済研究所所長

小松左京部会

テーマ 大正文化研究

伏見 康治 名古屋大学・大阪大学 名誉教授
松根 宗一 大同特殊鋼相談役 (社)経済団体連合会常 任理事
村田 浩 日本原子力研究所顧問

大来佐武部会

テーマ 世界の中の日本

小松 左京 作家
河合 秀和 学習院大学法学部教授
中村 隆英 東京大学教養学部教授

大来佐武郎 内外政策研究会会長 外務省顧問 国際大学 学長
江藤 淳 評論家 東京工業大学 工学部教授

北原 秀雄 前駐仏大使 (株)西武 百貨店顧問
木田 宏 国立教育研究所所長
小林陽太郎 富士ゼロックス(株)社長
篠原三代平 成蹊大学経済学部教授

滝田 実 アジア社会問題研究所 理事長
堤 清二 (株)西武百貨店会長 (株)西友ストアー社長
中根 千枝 東京大学教授 国際人 類学民族学会副会長
中村 貢 朝日イブニングニュー ス社代表取締役社長

松本重治部会

テーマ 二十一世紀における 日本人の生き方

松本 重治 (財)国際文化会館理事長
川喜田二郎 筑波大学教授
永井 道雄 朝日新聞社客員論説委員
中村 元 東方学院院长 東方大 学名誉教授

国際交流研究部会

柳瀬 睦男 上智大学学長

武者小路公秀 国連大学プログラム担 当副学長
村上 兵衛 作家
石井 好子 歌手

喜早 哲 ダーク・ダックス 歌手
佐々木 行 ダーク・ダックス 歌手
高見沢 宏 ダーク・ダックス 歌手
小林 道夫 チェンバロ奏者
佐賀 和光 建築家

佐々木信也 スポーツ・キャスター
千 宗室 裏千家家元
高平 哲郎 フリーライター
堤 清二 (株)西武百貨店会長 (株)西友ストアー社長

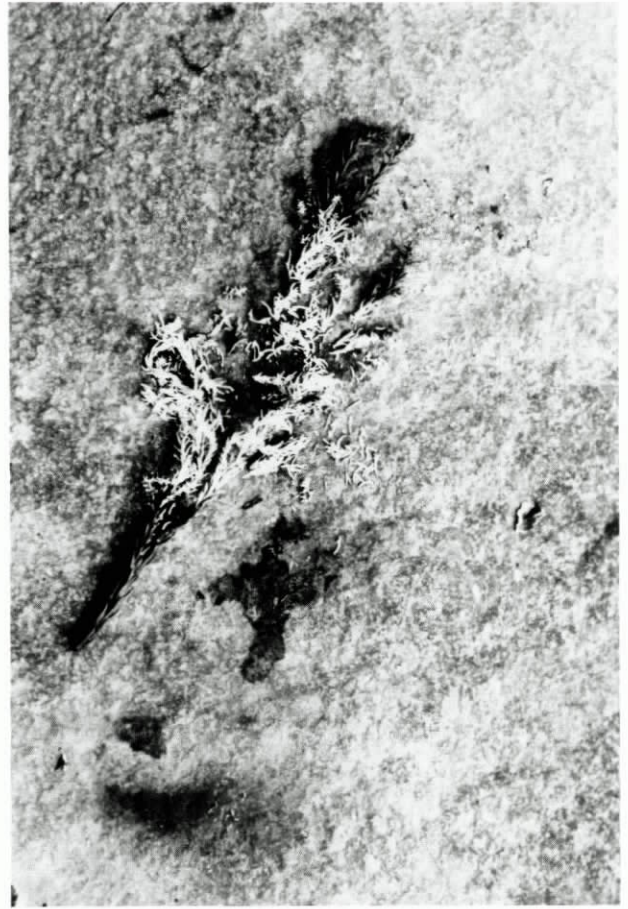
事務局

吉川 光 NHKモスクワ支局長
山城 祥二 山城組組頭 筑波大学 講師
村上 兵衛 作家

松葉千恵美 (株)二十一世紀企画 (株)二十一世紀企画
村野 京一 (株)二十一世紀企画

笠井 章弘 (財)政策科学研究所理 事長
生田 豊朗 (財)日本エネルギー経 済研究所所長
依田 直 東京電力(株)取締役企 画部長
山田 嗣 (財)政策科学研究所主 任研究員

〈各部会とも五十音順〉



21世紀フォーラム 第15号

発行 一九八二年十二月二十日

発行人 笠井章弘

発行所

21世紀フォーラム事務局

東京都千代田区永田町二丁目一

フレンドビル6階

(株)二十一世紀企画内

電話〇三―五〇八―二六二五

編集

21世紀フォーラム事務局

印刷

(株)有朋社

